

の一以上受けた者は駄目であると決めてゐる一方、フロリダ、インディアナ、ミシシッピ、北ダコタ諸州では、黒人の血を八分の一迄受けた者は許されると決めてをり、まことに笑止の至りと申されよう。それゆゑ、白人同志が結婚したと思つてゐたところ、髪の毛の縮れた黒人の子が産れでる混血は、くりかへされていつてゐる。黒人の賣笑婦はアメリカ至るところに居ることだから、こんな悲劇の混血児が、アメリカ社會を嘲笑しながらうまれてくるだらう。ついでに蒙古族との結合を禁止してゐるところが、十三州にも及んでゐることを附け加へておかう。

かかる差別は、つづまるところ、相手を劣等視するところから起つてくるのである。黒人は政治能力がないとか、智的能力に恵まれてゐないとかは、すべて偏見である。また、南部に於ける黒人學校の如きは、白人學校と同じ取扱ひを受けてをらないのである。それゆゑ、智的能力が白人に較べて劣るやうにしてある制度になつてゐる。今に於ても奴隸的な取扱ひを受けてゐるのであつて、決して奴隸解放が國法上になされたとは言へ、國民に精神の訓練が行届いてをらなかつたならば、なんの役にも立たないところである。一五九〇年度に、南部に於ける白人子弟一人につき拂はれた教育費は、平均、四十四ドル三十一セントのところ、黒人子弟一人については、十二ドル五十七セントしか拂はれてをらない。その比は三・五對一を示してをり、もつとひどきに

なると、ジョージア州での白人一人につき、三十五ドル四十二セントにむかつて、黒人一人には六ドル三十八セント平均しかあてがつてをらないので、その比率は、五・五對一をしめし、もつと甚だしきに至ると、ミシシッピ州に於ける不公平である。ここにあてがはれてゐる白人子弟一人にあてがはれてゐる教育費は、四十五ドル三十四セントなるときに、黒人にむかつては、僅かに五ドル四十五セントなのである。八對一の取扱ひをのぞんでゐるのだ。このことは、黒人學校はいかに不衛生的な、貧弱な施設であり、その一方、アメリカ人學校は堂堂たるものであるかと思ひやられる。すでに子供の時からして、かかる不法なる虐待と差別を強いてゐるのであるが、この雰囲気からかもし出される差別観は、將來、いかなるものを齎すかは、これらの出來ごとに見られるに違ひあるまい。アメリカ全土には、至るところに「黒人おことはり」の貼札がしてゐるのだ。海水浴場にとどまらず、旅館、散髪屋、劇場のみならず、高等程度の學校からしめだしを喰つてゐるのである。しかし、黒人は、そんな虐待を受けながら、白人社會に實力を以つて侵入しつのである。

いまだ、かかる状態であるから、黒人の職業は、靴磨きとか、便所掃除とかにたづさはつてゐるものが目につくことである。ことに靴磨きは、黒人の子供の得意とするところで、ボロ切れと



靴磨き臺をさげて市街をあるいてゐるさまは、アメリカ風景のひとつにも數へられるだらう。そのほか、汽車のボーイから、荷物運びなど、その張りきつてゐる人なつかしさは、心地よいものである。これは北部の風景であるが、南部では農園に働くものが多い。職業統計では三割六分迄農事に従ふものだし、次に特徴とせられる點は、下男下女の役を受けもつてゐるもので、二割八分となつてゐる。今日では、オリムピック選手として活躍したところであるし、藝術家、ことに歌謡と舞蹈に至つては、全世界に影響を及ぼしたジャズやチャールストンなど。外科醫はもつともすぐれた技能を有してゐると言はれ、有名なる學者も少くない。ジャストは生物學に、タトナは昆虫學に、フラーは精神病學に、ヒントンは現代に於ける梅毒研究者の最高權威の一人に數へられてゐる。そんなところから見ても、文化方面の仕事にたづさはつてゐるものも少くない。五萬六千人の教職員、六千人の醫業者、一千二百人の辯護士などがある。また、黒人のキリスト教は、黒人五百萬の信者と四萬二千五百の教會をもつてゐる。また黒人牧師は、二萬五千人の多きに達してゐる。しかし、黒人のキリスト教は、アフリカ化されたキリスト教で、世の注目をとどめるところである。

かかる社會の虐待のうちに罪人が出來てこないとすれば「うそ」である。罪惡は多くは、社會

へむかつての反抗心のあらはれとして見られうることもできる。おそらく、黒人の犯す罪惡のなかには、かかる點も忘れることはできないだらう。アメリカ人は、黒人の兇惡兇暴を口にすることもがあるが、これは、當然なされた反抗とながめてやりたい。なるほど統計の上では、黒人の犯罪者が増加していつてゐるやうであるが、その底には、哀れな理由が幾らもあげられるだらう。その一としては、教育の未完成であり、生活状態・經濟の逼迫してゐることにもよることだらうが、最後に大切なことは、精神虛弱とか、精神異狀に依つて罪をなす場合が多いのであるが、かかるものを作りあげたのは、だれの罪であらう。かかることを犯罪の原因にあげて、黒人種をあげつてゐる、鐵面皮さにむしろ驚かすにはおかない。二五七〇年の刑務所就役年限が、白人の場合には、平均五ヶ月であるときに、黒人は平均十七ヶ月半に及んでゐる。これには、勿論、殺人罪とかの長期年限も影響してゐるだらうが、最大原因は、辯護士をやとふだけの財政上のゆとりがないことだし、罰金刑をも體刑によつて、つくなつてゐるからのことである。とは言へ、暴行、殺人罪に占める黒人の位置は、大きいものである。二五八三年度に於ては、暴行罪四三・九百分率を占め、殺人罪は、四一・五百分率を示してゐるところを見ても、如何に白人にむかつての反抗心に燃えてゐるかあらはしてゐるかが知られる。これらの統計をしめされると、如何に



も黒人が兇暴性に富んでゐるかのとき印象を受けるのであるが、明らかに黒人に罪はないものと認定するのが正しいだらう。世界中に於て、黒人ほど生命の自由と、生活の愉快さを樂しまうとしてゐる仲間はあるまい。子供を可愛がる性質にめぐまれてゐることも有名である。身體の色は黒さと、犯罪に結びつけようとしたところで、それは無理である。その黒き皮膚からは、太陽のいきいきとした香りさへ、かくことができる。その、ほがらかな、單純な性質は、愛すべきものであらう。しかるに白人達は、黒人種の道德性におとつてゐることを説きあかすために、巧ましく表をつくつて見せるものである。すでに人口増加の表に於て、その「からくり」であることを指摘しておいたが、この犯罪統計表も同じ性質のものである。ことに、白人の方は、減少一方をたどつてゐるのに、黒人は増加の印象を植ゑつけるに大きな「ねらひどころ」があるやうに見られる。注意して、この統計を解釋する必要がある。

年 度	黒人犯罪者 一萬人につき	白人犯罪者 一萬人につき
二五四〇	一六〇・八九	二四・四
二五五〇	一九八・〇四	二六・四
二五六〇	二六〇・八七	三七・八

二五七〇	三八七・〇一	三八・四	八・九
二五八三	三四一・七八	三二・七	七・七

體質・體格の違ひを、すべて、劣等性、醜惡に結びつけるものであるが、黒人種の場合ほどひどきものはあるまい。その特徴が動物性に結びあはせて考へられてゐることである。もつとほかに、表現の仕方があると思はれるが、ここには、好んでヨーロッパ人が注目する點を二三あげておくことにする。よく言はれることは、黒人の頭腦が、ヨーロッパ人より十オンスも軽いことである。即ち、黒人三十五オンスのとき、ヨーロッパ人四十五オンスと列擧されるならば、まだしも、ゴリラは二十オンスであると書きたされるに至ると、明らかに黒人は、動物に近いとの印象を濃厚にする。頭蓋骨が非常に部厚いのが特徴であるが、それゆゑに、頭部を攻撃武器に使ふとの註をつけるに至つては、動物性を強烈におぼえることにならう。また、黒人種の體臭の強いことも、人々に依つて言はれることであるが、特殊の體臭をいだし、山羊のごとき場合と書きあらはされるに至つては、黒人種動物視があきらかに見られることである。われわれも、白人の眼には、猿にでも見えるかも知れないが、われわれからすると、白人は、あきらかに、猿・犬・山羊などに似てゐると思はれる。體質・體格の特徴は、相對的なものであつて、どんな風にも解釋が



つくことができると言へる。こんなことで、優秀性・劣等性が評價されたならば、たまつたものでない。まさしく、こんな偏見から一日も早く世界の人々が脱却しなければならぬ。ことに黒人種は、ながらく劣等視されてゐたから、ひよつとすると、偏見にとらはれ易くなることは、特に氣をつけねばならぬことだと思ふ。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

- 三三六〇
- 三三六一
- 三三六二
- 三三六三
- 三三六四
- 三三六五
- 三三六六
- 三三六七
- 三三六八
- 三三六九
- 三三七〇
- 三三七一
- 三三七二
- 三三七三
- 三三七四
- 三三七五
- 三三七六
- 三三七七
- 三三七八
- 三三七九
- 三三八〇
- 三三八一
- 三三八二
- 三三八三
- 三三八四
- 三三八五
- 三三八六
- 三三八七
- 三三八八
- 三三八九
- 三三九〇
- 三三九一
- 三三九二
- 三三九三
- 三三九四
- 三三九五
- 三三九六
- 三三九七
- 三三九八
- 三三九九
- 三四〇〇
- 三四〇一
- 三四〇二
- 三四〇三
- 三四〇四
- 三四〇五
- 三四〇六
- 三四〇七
- 三四〇八
- 三四〇九
- 三四一〇
- 三四一一
- 三四一二
- 三四一三
- 三四一四
- 三四一五
- 三四一六
- 三四一七
- 三四一八
- 三四一九
- 三四二〇
- 三四二一
- 三四二二
- 三四二三
- 三四二四
- 三四二五
- 三四二六
- 三四二七
- 三四二八
- 三四二九
- 三四三〇
- 三四三一
- 三四三二
- 三四三三
- 三四三四
- 三四三五
- 三四三六
- 三四三七
- 三四三八
- 三四三九
- 三四四〇
- 三四四一
- 三四四二
- 三四四三
- 三四四四
- 三四四五
- 三四四六
- 三四四七
- 三四四八
- 三四四九
- 三四五〇
- 三四五一
- 三四五二
- 三四五三
- 三四五四
- 三四五五
- 三四五六
- 三四五七
- 三四五八
- 三四五九
- 三四六〇
- 三四六一
- 三四六二
- 三四六三
- 三四六四
- 三四六五
- 三四六六
- 三四六七
- 三四六八
- 三四六九
- 三四七〇
- 三四七一
- 三四七二
- 三四七三
- 三四七四
- 三四七五
- 三四七六
- 三四七七
- 三四七八
- 三四七九
- 三四八〇
- 三四八一
- 三四八二
- 三四八三
- 三四八四
- 三四八五
- 三四八六
- 三四八七
- 三四八八
- 三四八九
- 三四九〇
- 三四九一
- 三四九二
- 三四九三
- 三四九四
- 三四九五
- 三四九六
- 三四九七
- 三四九八
- 三四九九
- 三五〇〇

10 さまざまよへるもの

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）



## 1

民族の哀れな姿として、さまよへる状態をも認めねばなるまい。一たび、本國を離れたるものは、この姿をなんらかの形で味ふことだらう。それほどまでに人間生活は、つねに強力なものに依つて守られて居らなければならぬ。しかるに、かかる強力なる「まもり」をうしなつたものは、地上をさまよはねばならなくなるだらう。一定した居住權を認めてもらふことが出来ぬし、それどころでなく、追放、迫害の運命にもあまんじなければならぬ。わが國にも、古來、處罰の形式として流罪・島流し・追放のごときものがあつたが、追はれゆくものの中には、なんとも言はれぬ憂愁がたちこめたことだらう。時には平家のごとく戰場にやぶれて都落ちをし、一族全體が、さすらひの哀感のうちに亡びてゆかねばならなかつた。地上生活に於て、持ちたきものは強き「まもり」であらう。凡そ、弱き民族と名づけられるものは、持つべき「まもり」をゆるされてをらぬことを意味してゐる。多くは、不運なる状態におかれた場合、一家族が離散する、或

ひは一國家が瓦解崩潰することもありうる。生活苦に追ひたてられて、流浪の旅にのぼらねばならぬものもあることだらう。あるひは、災害にあつて、逃亡避難しなければならぬ場合もあるかも知れぬ。すべて、さまよへるもの姿の一端である。しかし、強力なる「まもり」は、つねにかかる悲惨なる姿を未然に防いでくれることだ。

かかる運命をになはされた民族は、「まはり」に負かされたものと言へよう。外的條件を乗りこえるだけの堅忍不拔の精神にこと缺けてゐるものと見なされうる。個人の場合にあつては、一家を再興するとか、失はれてゐたものを取りかへすだけの勇氣と努力にふるひたなければならぬ。曾つては、隆盛を極めたけれども、近ごろは國運のかんばしくなかつた國が、再興意識にふるひたつて、建設に邁進しはじめるとも、みづからの中にしまつてゐた高らかなる「ところ」にめざめたからである。ひとへに民族がふるひたつとか、意氣銷沈するとかは、民族全體の心の持ち方如何によつて決まるものである。決して物資をたくはへることだけでは、建設・發展・進歩の事業をなしとげてゆくことは出来ないだらう。つねに一貫されたる生命の「かがやき」が光つて居らなければならぬ。それには、ただ自分を守ることのみならず、難局にあつては自己一身をも投げだす勇猛なる心がある。かかる心が一致團結をしてゐるときは、決してその民族生命



の一貫性を破られることはあるまい。即ち一國にあつては、けがされない國史であらう。その一貫性のために、各國民は大きな矜持にはりきつてゐることである。その點からすると、さまよへる民族は、自分たちのみの良いことばかりに汲々としてゐるやうだ。いかなる「さげすみ」「あなどり」にもあまんとしてゐるやうなところが濃厚である。さまよへるものには「責任」をもつだけの勇氣がないのだらう。一國家をもちうることは、その國民の獨立性に富んでゐることを證明してゐる。その點に於て、ヨーロッパ人たちは、おのれの民族優秀性を多分に誇ることである。白人ほど、獨立國家を多數にもりたててゐる民族はないと言ふのである。そのとき、他民族に依つてたもたれてゐる獨立國家は、指をもつて數へるほどしかないのも事實である。しかし、數の多い少いに依つて優秀性をきめることは出来ないと言へ、國家を持たない、さまよへる民はたしかに、あなどられ易いことになる。現在、地上をさまよへる民族と言へば、すぐにユダヤ人のことを思ひだす程である。わが國に於ても、ユダヤ人排斥の言論でにぎはつてゐることであるが、これには、もつと慎重なる態度が必要ではないかと思ふ。他國が排斥する故に、わが國もそれに従はねばならぬことはない。わが國は太古以來、他民族をある種のむだけの大きな抱擁力のうちに前進してきてゐるのだ。他國にあつては、ユダヤ禍になやまねばならなかつたかも知れないが、

わが國にあつては、かかる「わざはひ」までに、たもたしめぬであらう。わが國の傳統精神は、他民族を敵對視してきたことではないのである。つねに、まがれるものを正し、ひとたむ、まつらへる以上には、日本臣民たることをすら、お許しになつてゐることだ。こゝで、さまよへるものにつきまといつてゐる運命、原因のごときものを、いくらかでもつきとめたいと思ふ。つづまるところ、ユダヤ人の運命は、決して先天的なものでなくて、みづからがつくりだしていつてゐるのだとも言へる。さまよへる民族ほど、その宿命的なものを考へあはされることはあるまい。ユダヤ人問題を取りあげるまへに、ロマンチックなさすらひの民であるジプシーから、ながめて行くことにしよう。兩者のあひだには、共通したところの問題もあるし、また、ジプシー民族は、なぜユダヤ人程敵對視されないかの點に觸れてみよう。

ジプシーは、代表的なさまよへる民族である。殆んどユダヤ人のごとく地球全般にゆきわたつてゐる。アメリカや蘇州のみならず、アフリカからシベリヤまでに及んでゐて、その數を知らべることすら出来ないと言はれる。しかし、多く見積る人は、五百萬人位に及ぶのではないかと言はれてゐる。少く見積る時でも、二三百萬人と言はれ、バルカン地方だけで、百萬人を下らないとされてゐる。その中でもルーマニアに二十萬人、ハンガリーに十萬人ばかり、ヨーロッパ、ト



ルコ領に十二萬人位居るだらうと推算されてゐる。近時、人種學、言語學上、かれらは一千年前から、インド西北部から西方にむけて流浪をつづけた民であると決定せられた。それ以來、風俗習慣を固守しつづけてゐることは、ユダヤ人に於ける場合に相當してゐる。ジプシーは孤獨性をこのほか嫌ふ性質をもつてゐて、つねに一團をなして行動するものである。したがつて性格上は、いたつて「びくびくもの」であつて、かれらの宗教感からしても、夜をひどく恐れてきたものである。そんなところからしても、獨立的な生活を營なまうとはせず、つねに社會の裏面をくぐつてきたやうな傾向にある。ことにジプシーのとき少數民族にあつては、社會の裏面に生きることを先天的に要求されてゐる。弱少化された民族が、人間生活の裏面をねらつて生計を立てて行かりとすることは、むしろ必然化されることだらう。ユダヤ人と暗黒世界の取引きなどが、よく問題にせられるが、原因はやはりそんなところから來てゐるものと見られるだらう。ジプシーの場合でも、そんなことが思ひあはされるが、特に「窃盜」に長じてゐることは有名である。ジプシーがゆきすぎるころ、なにか物を、かつさらはれてゐないかと、向ふの人々は警戒しあふところである。ジプシーの老女は、運命判斷「うらなひ」に長じてゐるもので、世界各地でそんなに出くはしたことであるが、いつの間にか「もちもの」をとられてゐるのが普通のこ

とである。中世紀に於ても、ジプシーの窃盜常習に依つて排斥される最大原因をなしてゐたところのものである。

ヨーロッパにジプシーがあらはれたのは、凡そ五百年前のことで、ドイツのヘッセ地方に立ち至つた時は、二〇七四年と記録されてゐるところである。ハムブルグに到着したときは、二〇七八年のこととなつてゐる。その後スイスを経てフランスに入り、やがてイタリーにもひろがることになつた。二一六〇年ごろにはイギリスにも渡りついたことであつた。その當時から生活の根據を二輪馬車に求めてゐたことが記されてゐる。しかし、西北部、中部ヨーロッパでは車輛生活に依つてゐるが、大半は天幕生活を主としてゐるところだ。この民族は現在でもうろつきまはることを生活の中心に置いてゐるもので、別に國を持つとか、教會をもつとかの定着生活を營なまうしてゐない。半定着生活をしてゐるものは、冬期は町はづれに假住ひの家をたて、春期のくると共に、馬車に乗つて他地方にでかけるのである。その行き先を決めるのは頭目に依つて指圖せられるところで、頭目は裁判・承認とかの絶對權をもつてゐるものである。嫁どりのときでも頭目の言葉を待たなければならぬ。しかし、子供が出來ないときは、普通、もとの家族に送り返すことになつてゐる。一年の間にルーマニアの果てからオランダの北岸にまで、さまよひで



ることは度々のことである。生計は普通鍛冶屋を主業とし、そのほか自分達のつくつた小間物を賣りさばいてきたところである。ヨーロッパに於ては、馬の賣買に長じてをり、ジプシーの馬をみる目には、かなはないとされてゐる。しかし、何と言つてもジプシーの生命は、その音楽と舞踊の生活にかけられてゐると言つても差支へあるまい。ヨーロッパ大都市の喫茶店などでは、至るところで淋しみと熱情のこもつた獨特の音楽をまいてきたことであつた。ある時は百人を越ゆる楽団を以つて組織してゐるのを見た。日本でも「ボヘミアン」の生活などと言ふ言葉が傳へられてゐるが、ボヘミアンと言ふ言葉は、フランス語であつて、ジプシーのことを意味してゐるのだ。ジプシーの語源は「エジプト」といふ意味から出てきてゐるのであつて、エジプト人だと誤認したところから起つたものである。その服装や身體付まが、エジプト人をおもはしめたことなのであらう。ドイツ語の「チゴイナ」の言葉は、小アジアの言葉から來てゐるもので、「よこれたもの」「ふれるべからず」の意味を持つてゐるとせられる。「よこれたもの」の感じは、ジプシー族のみならず、他民族にむかつてよく感じるところの「あらはれ」と見なされる。鬼にかく自然の野天に生れきて、ふたたび、自然の「ふところ」に歸りゆく民族として、これほど美的にとんでゐるものはあるまい。中には、二輪馬車の旅路の上に於て「いのち」を終るものもある。そ

の時、その遺物や車輛をよその人に賣り拂ふことは、絶対にしないところで、遺物とともに車輛を焼拂ふのが普通とせられてゐる。しかし、この自然生活をいとなみきたつてゐる民族も、ヨーロッパはあまりにせまぐるしいところなのであつた。至るところで排斥、追放にあまんじて來なければならなかつたことであつた。弱きものがいぢめられるのは、他國の歴史にはつきまつてゐる物語りであらう。

すでに五百年前、ピエサス二世法皇がジプシーを批評して、ヨーロッパからきたれる盜賊團と言つてゐる。ヨーロッパに於ては、他人種の排斥原因が常に、宗教家の指導に待つやうなところが見られる。とにかく、ジプシーの窃盜癖はこの民族につきまとも致命傷であつた。フランスのフランシス一世は、ジプシーの國外追放を命令してゐる。オルレアンの領主は、たえず、この弱き人人に懲罰をあたへたところであつた。その甚だしきものは、イギリスに於て見られるだらう。エディンバラや、ハディングトンでは、絞首罪になつた記録がのこつてをる。背中や頬に烙印をおしつけられることは、普通の懲罰とせられたところである。ジプシトにとゞまらず、ユダヤ人にも「つきもの」である風説は、人を喰ふと言ふことである。ジプシーも人を喰つたと言ふことで死刑を宣告せられてゐる。こんな野蠻氣のなかにあつて、スコットランドに於ては、保



護を受けてきたところであつた。またオーストリアに於ては、合法的にジプシー族を居住せしめようとの努力が、はらはれきはじめたことで、マリア・テレシアが二四二八年に農民として定住せしめようと務めたが失敗に歸した。その後をついで、ヨセフ二世も、ジプシーに同情を寄せられたことであつて、強制的に定住さし、商業をいとなまし、子供には学校教育を受けしむるに至らしめた。今日にもジプシーの教室が見られるのは、ヨセフ二世のおかげと申さねばなるまい。ドイツ國に於ても、これと同じやうな方向に沿つて問題が、とりあげられてきたやうである。ジプシーを取りしめる法令が、たび／＼とりあげられたことであつた。近ごろでは、バイエルン地方では、二五八六年に職業とりしまりの法令ができて、ジプシー取締りにそなへられたことである。しかし、これらの迫害、取締りなどは、ユダヤ人の場合にくらべるならば、足もとにも寄れないだらう。ユダヤ人の場合には、取締りの度を過ぎて、つねに敵對視のうちに苦しんでこなければならなかつたのである。その最大原因は、人種上とか性格上のことより、宗教上からの敵對視が重要な原因をなしてゐる。それから、ユダヤ人の經濟上の活動に對する「ねたみ」もあつたつてゐることだらう。ジプシーが人種上の敵對視まで驅りたてられないことは、その宗教生活が固定的なものでないことに注目せなければならぬ。また、それほどまでに價ひしないところ

の弱少民族だつたからである。

ジプシーの宗教生活は、萬神論的なもので自然と結びあつてゐるものと言はれる。固定した宗教行事を持ちきたつてゐないので、落ちつくところ、その地方の宗教生活に表面上は従ふことが出来る。とは言へ、本質的にはジプシー本來の宗教感を少しも損はずに保つてきてゐるところでもある。咒文や「まじなひ」に、大きな神秘力を認めてゐるところで、老女達は妖法に通じてゐるとせられる。咒文をとることに依つて、「かたき」の者を倒し、或ひは友の困難を助け救ふことができると思はれてゐる。また、運命の前兆とか、豫感にひどく敏感なところから、觀相術、運命判断を得意としてゐるところだ。しかし、これらの宗教感なるものは、他宗派に向つて對立的なものともまだに立ちいたつてゐない。だから、イギリスに行けば、新教徒になると言ふ具合である。ギリシヤにあつては、ギリシヤ教會に屬し、回教徒の住まふ地方に入れば回教徒となり、ルーマニアではルーマニア國教に従ひ、ハンガリーに行けばその地方に多數を占めてゐるカトリックになるといふ風である。しかし、このことは、この民族が恐るゝにたらないものである。ことを物語るにすぎない。民族の魂を結びあはすところの一貫性のことかかげてゐることである。その點に至るとユダヤ人は排斥を受けるほどに、底知れない力が思ひあはされるのだらう。言は



は心の一貫性の前に屈せないとこの魂をもつてゐることだ。しかし、弱きものは卑屈になると見え、ユダヤ人の「卑屈性」などは、注目せられるところでもある。ことにジプシーは「こしぬけ」の代表的なものやうに見なされるのも致し方があるまい。今日まで、諸國を流浪しつゞけえられてゐるもの「こしぬけ」であつたからだとも言はれうるだらう。至つて宿命的で運命を乗りこえるだけの勇氣をもつてゐないことである。しかし、心もちの愉快で人つきあひの良きことも、やはり弱きものゝ受持つ役目なのかも知れない。

ルーマニアに於ては、二五二六年迄、ジプシーの中で身體の自由を奪はれてゐたロビーと名づけられる階級があつたことで、教會とか貴族の所有となつてゐたものである。ロビーは自由に賣買・交換せられたところだし、アメリカに於ける黒人種の境遇に相應した立場におかれてゐた。この制度はハンガリヤ、ツランシルバニア地方にも残つてゐたことであるが、二五四二年に廢止せられるところとなつてゐる。

ボヘミアンの生活として藝術家によつて喧傳せられる、この小數民族にも深い困難と悲哀の憂鬱なかげに取りかこまれてゐなければならぬ。國家のごとき大きな生活の「よりどころ」「まもられるもの」を失へるものは、至るところで「あざけり」と「ののしり」を受けてさまよはねば

なるまい。人間生活に於ては「さげすまれない」ことであり、互ひの人格をみとめあふことであらねばならぬ。幾ら政治的、經濟的、軍事的に優勢であると言へども、弱小民族の人格をふみにじるやうでは、決して世界統治に向つての明るい巨歩をすゝめることは出來ない。すでにこゝに取扱つてきてゐる民族問題、人種問題は、いかに「さげすまれ」「ふみにじられた」かのあとかたに他ならない。その中であつてユダヤ人問題は、世界の動向とつなぎあはされてきてゐるほどかれらの生活闘争は、つねに必然的なものにさせられたのかも知れない。生きることは闘争であり、適者生存の法則をみとめしめようとするヨーロッパ人こそ、つねに戦亂と動亂の根源であるかも知れない。民族問題、人種問題が生存競争に直接つながつてとりあげられてきてゐる。なかには、他人種の能力とか才能の限界をきめて「指導能力」がないと、公然と決めつけて迄、政治上の問題に結びつけねばならぬほど、世界の情勢はさしせまつてゐる。これらの原因がひとへにヨーロッパ人の營んだ植民地經營の不合理から惹きおこされてきてゐるのだ。なるほど、ヨーロッパ人は植民地を得ることに依つて、一大文化圏をきづきあげたかも知れないが、あくまで心の高さを抜きにした物慾的などころから、こゝに破綻をきたさねばならなくなつてゐる。その點、ユダヤ人の行爲も同じやうなことが言はれるだらう。世界經濟機構を、おのれの足場にしようとし



てきたところであるが、各民族の復興意識・自覚・めざめによつて撃破せられやうとしてゐる。「おのれ」のみを守り通さうとするものが、反つて敗北してゆかねばならないやうな矛盾に落ちているのが歴史の運行のやうだ。今までの世界歴史は「自分可愛さ」に終止してゐる。みづからを護り、他人種、他國家をいつまでも踏みにじり、おさへつけて置かうとの体制が常に破綻をきたしてきたところである。ヨーロッパ中世教會制度、封建制度、世界植民政策など、すべて「おさへつけ」「ふみにじられる」ものを生じたことである。ユダヤ人はふみにじられてばかりゐたと言へ、またふみにじらんとしてきたところもあるだらう。それが近ごろのユダヤ人問題である。民族問題、植民地問題もふみにじられたか、ふみにじられぬかの二つの論點を中心として、あがりさがりを繰り返してゐる。このいつ迄も解決のつかない問題も「おほみこゝろ」に依つて始めて解決のつくところと信じてゐる。われ／＼の民族魂は虚心坦懐として、世界に向きあへることが出来る。幾らかの「われよかれがし」の僻見をもつてゐては、これらの問題はますます、もつれるばかりで、その僻見は「おさへつけるもの」と「おさへられるもの」が截然とする迄鬭争がつけられるし、それでは従來の世界體制から一步もでないことになる。

前ヨーロッパ大戦後、弱小民族の保護とか獨立とかが取りあげられたところであるが、決して

高潔なる世界觀から叫ばれたところの方針ではなかつた。英米側にして見れば、對立から對立に苦しんでゐる弱小民族の機嫌をとつて、みづからの體制を強化しようとの魂膽からであることは明らかであつて、決して對立觀から抜けでてからの政策ではなかつた。その眼目としたところは、英米のごとき強力なる他民族力をつくらしめざらんことであつたのである。それ故なるべく世界を多數に分割・獨立せしめて、世界の政治力を虚弱化せしめて、自分らはいつまでも、大きな額をしてゐようとの欺瞞政策からであるのである。しかし、世界はいつまでもこの欺瞞政策にひつかゝつてをりはしなかつた。第二次ヨーロッパ大戦も失はれたものを取りかへす戰爭として開始せられてきたところである。ドイツに於ては、すべて「とりかへす」の方針で強力政策が進められてきたことである。國內にあつては、ユダヤ人に依つて奪はれてゐたものを取りかへすことであつた。ユダヤ人に依つてけがされてゐる、あらゆるものを取りかへすために全力がそゝがれたことであり、外に向つては、非平等な條約の廢棄、舊植民地の獲得と、うばはれたものを奪ひかへすための強力前進がすゝめられたのである。奪ふか、奪ひあふかの鬭争がヨーロッパの地には、たえずつけられてきたものである。ユダヤ人問題もその一つであらう。



## 2

おなじ、さまよひ歩くと言ひながら、ジブシー族の生活法とユダヤ人のとは異なつてゐる。ジブシー族の方では地方に「やどり」をすることは、一時的のことであつて、「ねじろ」「あしぼ」を作ると言ふやうな方法を取らないのであるが、ユダヤ人の場合には、まるつきり異なつてゐる。即ち、各地に「ねじろ」「あしぼ」を盛りたてて、相互に連絡をとるのである。その連絡線が大きな力となつて、ユダヤ人の発展を盛りたててゆく方式なのである。世界ユダヤ化などと、さねがれるところには、この強大なる組織のために世界各國が利用され、喰ひものにされてゐることを言ふのだ。だからユダヤ人が民族の寄生虫だと言つて排撃せられてくることになる。その方法組織の微妙なところからすれば、恐るべき陰謀團のやうにも考へられることだが、今一步高く理性的にながめて見るならば、かれらとて哀れなる、さまよへる民族と申さねばなるまい。自分達の生活確保のためには、裏の裏をもくぐらねばならなかつたのだらう。國をうしなつてから二千年間、他民族の間に散らばりながら、なほ民族の餘命をたもちつづけてゐる。しかも、かれらはその中に限りなき自尊心をいだきながら進んできてゐる。たしかに問題になる種族である。今日

世界各地にはさまかれてゐるユダヤ人總数は、一千七百萬人に及ぶものである。二五九八年度の推算では、一千六百七十萬人となつてゐるところだ。總人口からすれば、さして大したこともなさうであるが、これが世界の禍根と呼ばれるところには、かれらの一種獨特の生活法があるからである。他民族間にあつて異なるものとして存在し、非妥協的であつたところに、いつも排撃を喰ふ一原因がある。一國內にあつては、他民族同志は互ひに一國家の理念・生活法の中に融けこんでゆくべきが、基本的なことであるのに、かれらは頑として、とけあはうとしなかつたのである。また、かれらにして見れば、しひたげられればしひたげられる程、自分なるものを固く持ちつづけたところもあるだらう。それゆゑ、ユダヤ人はしひたげられたからして、ユダヤ人たり得たとの説もなりさうである。今日に至るも、各地に追放・迫害・排撃にあつて、地上をうろつきまはつてゐることだ。

歐米の諸都市を歩いて見て、ユダヤ人の発展におどろくことである。目抜き商店はほとんどユダヤ人に依つて經營されてゐるのが普通である。そんなところからして、ユダヤ人が多いやうな感じを受けることも争はれない。ところがこの種族は都會地に集まつてきて、田園地方に喰ひこんでゆかないことである。そこにこの種族の特徴と缺點があるのであつて、このことを、ユ



ダヤ人が一國家建設の出来ない一大原因ともなりうる所である。前ヨーロッパ大戦以前のヨーロッパ各地についても、かかる傾向が論証されてゐる。地方の小都市に散らばつてゐたユダヤ人が次第に大都市に集まつてきてゐたことである。ユダヤ人増殖率は低い方だと言はれながら、二五三年のベルリン（ブランデンブルグ州を含む）の人口四萬七千四百八十九人であつたものが、その後三十九年経つた二五七〇年には十五萬一千三百五十六人に達してゐたのである。まさに三十割以上の増加である。ウィーンに於ても同じやうなことが言はれうるのであつて、二五四〇年に七萬三千二百二十二人のたものが、その後三十年の二五七〇年には、十七萬五千三百十八人で略ぼ、十四割の増加をしめしてゐる。そんなことは各地大都市に就て言はれうるのであつて、フランスなればパリに、イギリスに於てはロンドン、ポーランドに於てはワルソーと言ふ風であつた。しかし、この中にあつてアメリカのニューヨークほど特異性をしめした市街はないであらう。この市街の全機構はユダヤ人の支配下にあると言つても過言ではなく、ここに集まつてゐるユダヤ人は、二五八〇年に百六十四萬三千十二人をしめしてゐて、その當時のニューヨーク市人口の三割を占めてゐたことになるのだが、それから今日までには二十年以上経つてゐるし、昨今ヨーロッパ各地からユダヤ人の避難民が押しかけてゐることだから、名實共にユダヤ人の掌中に

あるところだ。フランスの作家ポール・モトランの「ニューヨーク」と題する單行本の中には、これらの内幕が名筆を以てあがかれてゐたことを思ひだす。ニューヨーク港入口の自由の女神の像は、ユダヤ人の自由港であることを祝願してゐるのかも知れない。

こんなところからして、各國にちらばつてゐる人口が、その一國にとつてなんの弊害もなささうな人口率として低く現はれるかもしれないが、その社會的に及ぼしてゐる力は、押し測ることも出来ない程、絶大なものだと思はれるだらう。ユダヤ人のヨーロッパに於て最も多いところは、ソビエトロシアであつて、二五九八年の推算では、三百三十二萬五千人に及ぶものと見られてゐる。その内譯は二五九六年度に於て占める人口率は、ウクライナ地方では、五・四百分率、白ロシア地方では八・二百分率、中央ロシア地方では〇・七百分率で、ロシア全體の人口度に於ては二・二百分率に過ぎない。ヨーロッパ地方に於て人口度の上から一割を占めてゐるやうなところは、ほとんどなく、二五九三年のドイツに於いて、ユダヤ人の人口率は〇・八百分率を漸くにしめてゐるのであるけれども、ドイツ政府から抑壓、迫害せられる程の勢力をしめしてゐたことでも思ひあたることのできるだらう。二五九八年度の推算によると、ルーマニヤに八十萬人、ドイツならびにオーストリア地方を併せて四千七萬五千人と見られ、ハンガリーに五十一



萬人、イギリスに三十五萬、チエツコスロバキアに二十九萬、フランスに二十八萬人にゐると計算されてゐる。イタリアの如くは全國通じて五萬人に過ぎないのであるが、イタリアだけのユダヤ人勢力だけでも大なるものがあつた。二五九四年に於て十一人からのユダヤ人大將が存してゐたことであり、上院議員に至つては、十四人を數へてゐるのである。それも前ヨーロッパ大戦前には皇帝に依つて任命された上院議員が三十人に及んでゐたことであるのだから、その勢力たるや國家の樞機にあづかつてゐたものである。また、イタリアの智識階級はユダヤ人に占められてゐたとも言へるので、二五九四年にも、大學教授、助教授をなしてゐたユダヤ人が二百三名にのぼると、イタリアの皇帝御自身のお口から、かかる數が示めされてゐることだ。こんなところからして、ユダヤ人排斥の主要原因のひとつとしては、社會上に獨占する高級職業にむかつての反撃が擧げられる。他國家にあつて、その國家の生活法に従はざる他人種に依つて、重要地位が占められるとするならば、由々しき問題であることが分る。それ故、ヨーロッパにおこるユダヤ人排斥は、日本に於けるが如く理論及び統計上からの據りどころでなくて、現實の問題として展開していつてゐるところである。ユダヤ人の行くところ、早晚、この種の問題を惹きおこしてくることが思ひやられるので、アメリカだつて、いつこの事から、かもされる人種闘争が起りうるかも

知れない。戦時中に於ても露業の類發するところには、ただの賃金上からの問題でなくて、次第にユダヤ人排斥の方向にむかつてゆく可能性が多い。アメリカ社會に於てもユダヤ人は、一般から賤民視されてゐるのが普通のことである。ユダヤ人がはびこれば、はびこるほど、この人種差別觀と共にいつか、ここにも爆發をおこす火藥がひそめられてゐる事が見られる。ユダヤ人は自分らの連絡を密にして、なかなか他人種の仲間の中に、はいつてこないものである。この特徴は必ず排斥せられる原因となりうるだらう。

二五九八年に書けるユダヤ人の世界各地分布状態をあらまし記しておくことにする。ヨーロッパ大陸を通じて九百九十萬八千人を算し、アメリカ大陸をあはせて五百二十八萬六千人であるが、その中でもアメリカ合衆國に大半ゐる所であつて、四百七十萬人に達してゐる。アジアに於ては八十六萬八千人であり、ことにアジア東岸地方には、さほど迄の數に及んでゐない。二五九四年ごろ日本に五百人、支那に九千人、滿州に八千人居ると見積られてゐるが、上海などにはすでに小さい形なりにユダヤ人問題がひきおこされたところだらう。曾つての支那ユダヤ人財閥のサツスーンの名などは、今にわれわれの腦裡をさらないことである。アフリカ大陸には六十萬九千人、濠州に三萬人程度はさまかれてゐる。これらの民族が相互に連絡を保つて經濟上のみ



ならず政治的にも進出してくれば、やはり、根絶しがたきユダヤ人問題が再燃するに違ひない。かれらの工作は國家意識を崩壊させて自己樂籠の中に、世界を支配しようとしてゐるところであつて、やはり最大な注意と用心が拂はれるべきことである。そもその根源は自己自身の中に、をさめてゐるとも眺められることであつて、かれらの信じるユダヤ教の中に存在すると申されよう。セムの宗教はユダヤ教・キリスト教・マホメット教にしろ、絶対神を信じるものであつて、全智全能の神である。この思想が他民族の神の存在をゆるすことなく、排撃するところとなつてあらはれるのであつて、キリスト教・マホメット教のたどつた経路も同じことであつたが、ユダヤ人の思想形態も同じ方向をたどつてゐる。この思想が他民族を賤視する根元となるところで、ユダヤ人にあつては、ことのほか著しい點が見られる。ユダヤ教の經典タルムードには、他民族を奴隷視し、畜生視してゐる箇條さへみられる。そして自己民族の絶対優秀性が書きつらねてあるのであつて、全智全能の唯一神にえらばれたる種族は、ユダヤ人なることを信ぜしめてゐる。なほ、世の最後に於ては全世界をユダヤ人が支配するとの宗教觀であるから、こゝから生じる思想は、世界支配と世界獨占の方法をとつてあらはれてくるのだ。キリスト教のみならず、マホメット教、ユダヤ教が世界文化に向つて、獨占的立場をとらうとしてきたところに他民族の信

念と、つねに衝突をなしてきたものなのであつた。こゝにセムの宗教形態はわが國のごとく、他民族力の力をして世界に貢獻せしめるがごとき、解放への道をとらずして、自己一色で塗りつぶさうとの野心にかられてゐる。すでにマホメット教がこの思想によつて、つまづき、同じことはキリスト教についても言はれ、そんな點からすればユダヤ人自身が、みづからの禍を世界に求めあるいてながれてゐるやうにも受けとられる。こゝからするときは、わが國の宗教觀と全く相反するものである。わが國のは神人一體、佛凡一體であつて、つねに「かみなるもの」「しもなるもの」が區別せられてゐない。凡夫そのまゝが佛となり、日本人がそのまゝ、護國の神となりうるのである。しかるに、セムの宗教にあつては、はなればなれをなしてゐる。「はたらきかけるもの」と「はたらきかけられるもの」とが別々のものなのである。しかるに、わが國の宗教觀では「はたらきかけるもの」と「はたらきかけられるもの」とが同じものなのである。それゆゑ、逃げかくれをしてゐる間は、回天動地の大世界にまで立ちいたることを得ないのである。向ひあひの對立を乗りこえて、大きな世界にとけあへるところに他民族を生かしうることが出来る。即ち自己一身にあつては、つねに「つゝましく」邪心をはさんでゐないことである。他民族のために心からはからつてやることのできるのは、この宗教觀に立ちて、初めて、世界に「ゆきつまり」を齎



らさないこととなる。宗教なるものは、民族の「たましひ」をつちかひ養つてゐる重要なものである。それが、つねに開けいであつて、人間の行爲、身のふりわけ方をも決定するところともなる。もとより、キリスト教とユダヤ教は、現在のごとく敵對視あつてゐたところのものではなかつた。ユダヤ人の發展に伴つて、キリスト教もひろまると言ふ時代もあつたのだ。しかるに後世、ヨーロッパにキリスト教國が確立せられるに至ると、イエス・キリストを認めないユダヤ教と對立し合はねばならなくなつたのは當然なこと。ユダヤ教にあつては、イエス・キリストを救済者とみとめないし、その教によつてなりたつ教會を相手としないからである。それ故、ヨーロッパに於けるユダヤ人排撃は、信仰上の相違からも根深くおこされてきてゐる。その上、キリスト教徒側からすれば、キリストを賣り渡したものがユダヤ人であつたことから、つねに復讐的なものに驅りたてられやすい動機も見逃がされないと。そんなところから、ユダヤ人を賤しめることは、キリスト教徒の觀感をものがたるやうに思はしめるものともなる。

ローマンチック時代の詩人の心を惹きつけた「さまよへるユダヤ人」の題目にも、やはりこのキリスト教的な復讐心がかもされてゐるものと見なされよう。グーテ自身もこの題目のもとに、詩をつくらうと構想したと自叙傳に述べてゐる。即ち、キリストが十字架を背負つて歩いてゐる

とき、ユダヤ人が「早く歩け」とあざけたのに對し、キリストは「自分は行くけど、おのれが歸りくるまでお前は待つのだ」と答へたとの言ひつたへが、この着想を惹きおこすものになつた。けれども全ユダヤ人の運命にも似たところがあつて、哀感がともなつてゐる。即ち、キリストが再びかへりくるまでさまよはねばならぬと言ふのであつて、あきらかに罪罰をかうむつたことを喜んでるところが見える。キリスト教の心理からは、かゝる「しかへし」の思想が濃厚にわきてくる要素がみとめられる。この物語りが、ヨーロッパでひろまる動機をなしたのは、二二六二年にライデンに於て小冊子がつくられたのである。その中で、シユレジツヒの司教が二二〇二年に、ハムブルグに於て一人のユダヤ人にあつたところ、それがキリストに依つて罰せられた「さまよへるユダヤ人」そのものであつたと、しるされたことであつた。現今に至るも、このユダヤ人は、さまよひつゞけてゐると言ふので、キリスト教徒達を喜ばす一手段となつた。それどころでなく、オランダ語、フランドル語、フランス語、イギリス語に翻譯せられて人氣を呼ぶに至つたことである。この物語りは、全ヨーロッパにひろがつたのみならず、おのれこそ「さまよへるユダヤ人」だと名乗りをあげて、でる者さへ出でて、ヨーロッパ社會をものさはがせしてきたものである。二二六二年にブラーグにあらはれ、次ぎの年にはリュベック、その次ぎの年にはババ



リアにあらはれたりとどまらず、ヨーロッパ各大都市にもそれ／＼出現してゐるのだ。パリにあらはれたときは二三〇四年のこと。ミュンヘンにあらはれた年は二三八一年、それからロンドンにあらはれたときは、其の後百年もたつてからのことである。まったく人間の心理、信仰の恐るべきものが、このひとつの、さういふ着想の中にあがきだされてゐる。「さすらへるユダヤ人」は、ヨーロッパのみにとどまらず、アメリカにまで飛火していつたもので、二五二八年、ソートレーキ市に於てあらはれたことが報告されるに至り、いままでのところでは、これが一番最後の「さすらへるユダヤ人」だと言ふことになつてゐる。單なる噂が心に幻影を惹きあげるのみならず、事實となつてあらはれたところに、この話がさししめす重要さがある。いかに噂とか、迷信、宗教とか、國民の心の暮しに大きな「はたらき」をなすものであるかと言ふことが分る。近來、思想戦の言葉が使はれてゐるが、宗教傳道のごときは、思想戦の尖端をなしてゐたものだと言はれよう。あらゆる思想の奥にかくれて、宗教は母胎のごとき活動をつゞけてゐる。植民と宗教傳道とが、切りはなされない關係をたもちつゞけてゐるところにも、こんな「わけ」が見られるからだ。植民は單なる種族の發展にとどまるのみならず、つねに心と心の連絡のためたれてゐることを、さししめすものだ。現今に於ては、これらの心の働きを、「文化」といふ名前のもとに

しめくゝつてゐる。日本國の場合にあつては、「みこともち」の言葉が、この働きにあたつてゐよう。兎にかく一國のたもたれてゐるのも、民族の亡ばすに存してゐるのも、究極なる裏づけをなしてゐるところのものは、高き「こゝろ」がきらりと光つてゐることだ。ユダヤ人の今日あるところの最大原因は、かれらが異なる風俗、習慣、ことにユダヤ教を保ちつゞけてゐるからだと言へよう。

遂にキリスト教も、ユダヤ人を改宗さすことは出来なかつたのである。ユダヤ人を改宗せしめようとの試みは幾度びとなく爲されたもので、古くは一二六〇年ごろ、グレゴリ法皇が手をつけてゐるが、特に強制的なことは控へてゐた。中世には強制的なことも行はれたことだが、成功しなかつた。その結果は、同じ信仰を信ぜる者たちを、分離、隔離する方法をとるに至つた。まさしく異なるものは、病菌のごときもので、それを根絶するか、隔離する方法をとらねばなるまい。しかし、問題は單なる信仰上のことばかりでなく、その經濟活動にも「おそれ」をなしたところが見える。一八三九年のラテラン會議に至るまでは、ユダヤ人の商業能力はかへつて、諸侯および、司教達からも保護された形でさへあつたが、キリスト教國の獨占國を確立する上には、ユダヤ人を閉めだし、その活動を制限することであつた。それまでには、キリスト教からユダヤ



教に改宗する者さへ、幾多の例がのこつてゐる。だから、キリスト教徒がユダヤ人に反感、敵對感を持ちはじめたのは、中世中ごろからのことである。その敵對感は宗教家の手に依つてけしかけられていつたとさへ思はれる。中世も終りごろにかゝつて二二一五年のこと、ポール法皇四世はユダヤ人の権利を奪ひ、隔離することを命ずることになつた。やがてローマにユダヤ人・まぢの區劃がとりきめられて、自由行動を禁じ、それ以來ヨーロッパ各地にこの制度が實施された。しかしこの制度は、かへつてユダヤ人他日の發展及び意識・團結をはかつてやつたとも言へる。土地所有地を禁じて、たゞ金貨しの商賣をゆるしたところに、金融方法に長じさす原因、また秘密結社的にならしめたのだらう。今日の今融市場制度はこんなところから發展をする宿命をさへもつてゐたことだ。この區劃から、外出するときには、帽子の色とか、徽章とかによつて、ユダヤ人であることが識別されたものである。かゝる差別制度は要するに、同化力の偉大性がなかつたことをあらはしてゐる。それどころか、ヨーロッパ人がおびえてゐる原因には、ユダヤ人に迫害を加へてやつた。その「しかへし」がくると思つてゐることだ。他民族を同化さすだけの抱擁性のある國家でない以上は、世界發展とか、世界植民政策を論ずる資格はないものと決めうるだらう。ユダヤ人の解放されたのも極めて最近のことである。英國に於て、その運動が始まつてか

ら漸く二百年位のものである。ポルトガル、ロシアに於ての解放がなされたのは、こゝ三十年前のことである。しかし、近代資本主義の發展とともに、世界金融市場を掌中にをさめていつたものこそ、ユダヤ民族なのであつた。ドイツに於ても、資本家としてのユダヤ人が、ヒットラー政権に依つて一掃せられることになつたものだし、現今の世界戦争の裏には、このユダヤ人問題が大きな原因をなしてゐることも見落されない。ユダヤ人の發展・排斥は、古代よりつきものゝ運命であつて、そんな點からすると、さまよへる民族として、いまだに所をえざるものと申されよう。

## 3

現今のユダヤ人問題は、中世紀に於ける問題と本質上には異なつてをらない。中世紀以前のユダヤ人の活躍を思ひあはすならば、今日の依つておこつてゐる原因を突きとめることができるだらう。要するに、中世紀に於ては、ヨーロッパ人とユダヤ人との鬭争であり、勢力の奪ひあひから起されたものである。即ち、ユダヤ人の隆盛をヨーロッパ人がうらやむことになり、みづからがその活動にあたらうと心がけるに至つたものである。たとへばハンザ同盟のごときもの、ある



ひは商業上の組合ひをつくつて、ユダヤ人の勢力驅逐に務めるところとなつた。最後には宗教權勢と結びあつて、抑壓することに成功したものであるが、この問題の底には、人種、宗教上のことからのみならず、太古からの歴史的宿命の一線をたどつてゐたところのものがある。それは、ヨーロッパ大陸を中心として、こゝは東洋と西洋との力が、「うばひあひ」「きそひあひ」をかなでてきたことを知るであらう。すでにベルシヤ帝國は、ギリシヤに攻めこみ、カルタゴはローマをおびやかしたところだし、サラセン帝國は、スペインから南佛をうかゞはんとしたし、その後にも蒙古軍の侵入にとゞまらず、トルコ帝國の活躍に備へて十字軍を組織せなければならなかつたのである。この大陸におけるほど、東方民族と西方民族とのおし合ひへし合ひが繰り返されてゐるところはあるまい。ユダヤ國だとして、この勢力の奪ひ合ひの「うづまき」の中に犠牲となつたものである。しかし、この情勢の中にユダヤ人はうまく自分達の民族を發展さす方法を見出してきたものである。兩方の勢力にあたりさばりのないところの商人になるの路をえらぶことはなつた。即ち、東西兩勢力圏の間を「なかもち」するとか「なかがひ」をすることに依つて、瀋亂・動亂の中に直接、巻きこまれることをさける、ずるくて賢明な生活法なのであつた。現今に於てもユダヤ人は、この方法を踏襲することに依つて、生きのびてゐるのだ。ユダヤ人が卑屈

であると、のゝしられるところには、かゝる生活法が自然にしからしめてゐるところである。しかし、かれらの信念とか習慣は依然として東洋生活の上に根じるを置いてゐたものだから、中世に於けるユダヤ人排撃の裏には、東洋と西洋との勢力争ひの變形されたものとして眺めることもできる。

アレキサンダー帝國の榮えてゐるときは、ユダヤ人は地中海沿岸の商業都市の至るところに居住地をつくつて、商業上の覇權のみならず、航海權をも支配してゐたものである。ことにアレキサンドリアには、海岸に沿つて大なる居住地を有し、多數の船舶をそなへ、ナイル河航行のことも、ユダヤ人の手に一任せられてゐたと記されてゐる。それゆゑ、フェニキヤ人の發展方法を受けつぎ、そのお株を奪つてきたところであつた。そのお株が奪はれてヨーロッパ人の手に渡つては、近代植民地經營となつてあらはれたとも見られる。ローマ帝國に依つて、ユダヤ國が亡ぼされて以來は、このほか商業基地の建設に努力をしていつたもので、バビロニアは、その中心地のやうに見なされる。そこから東洋の産物をヨーロッパ各地に賣すことになり、この東西兩洋の貿易には、ユダヤ人が主としてあつたものであつた。エプロ河をさかのぼつてはトレドに至り、ライン河に沿つてはコロンにあたりまで、ダニユール河をくだつては黒海に達する廣範圍に



わたつて、行商人として商業権を確保してゐたものであつた。商品仲買人としての活躍は、バルチック諸國からの製産物を一手に受けとつてゐたのみならず、西部ヨーロッパに設けた商業基地は、將來のヨーロッパ諸都市をつくりあげる「もと」ともなつたのである。リヨン、コロン、ニールンベルグ、レダンスベルグ、ロンドンなどの諸都市は、ユダヤ人居留地から發展をなすに至つたとも申される。まさしく、このユダヤ人の活躍に「ねたみどころ」を覚えて刺戟を受けたことが、近世ヨーロッパの開拓をなしたことになつてゐる。それゆゑ、双方は互ひにたすけあつた點もみのがされない。むしろ近代ヨーロッパの躍進は、ユダヤ人のおかげにさへ負ふてゐることを認めねばなるまい。ヨーロッパ人はかゝるユダヤ人の發展をかれらの世界史の中に書きこむことを嫌ふかも知れないが、正直に言ふならば、近世ヨーロッパ人は、ユダヤ人の遣り方をまねし、まなんだものとも見られる。それゆゑ、現代ヨーロッパ人の遣り方には、濃厚にユダヤ民族的な發展方法が受けつがれたことを忘れてはならない。ユダヤ人と敵對視したと言ひながら、自分みづからが、ユダヤ人になることなのであつた。そこに近代物質文明が「ふるさと」と血を忘れて、言ひかへれば物質力に支配されない尊い「こゝろ」を失つて發展をつゞけるやうになつた最大原因がある。すでにヨーロッパは中世紀に於て、完全にユダヤ化されてゐたとも見なされ

る。かう言ふ意味に於て世界主義を唱ふるユダヤ人の思想、見方に、いつの間にか染まつてゐたことになる。今ごろになつて、ユダヤ化の危険など唱ふるなど、すでに時効がかゝつてゐる。むしろ白色人種こそ、ユダヤ人の一族と見なされるのが適當なる見方かも知れない。

今日の世界經濟機構は、その根原をユダヤ人の東西兩洋貿易の過程にながめることが出来る。投機によつて資本力の充實をはかつたのは、この民族の特徴である。金本位の貨幣制度に致らしめたのも、この種族の活動に待つところであらう。通商自由の根本理念もかれらの生活法のなかに貫いてゐる主義なのである。さうながめてくるならば、今日の英米の經濟機構は、中世紀以前のユダヤ人活躍の方法に、理論づけをあててゐるものに過ぎない。あたらし、ドイツ國がこの經濟機構を痛撃するところにも、相當な理由がみられることである。兎に角、ユダヤ人の植民地化は、經濟的な支配を意味してゐたとも取られる。

東洋貿易における立場は、フェニキヤ人の活動にも等しいところが見られる。チールのガラス製造、紫色染料の製造のごときも、ユダヤ人の手にゆだねられてゐるものだつた。東洋の香料、香油の輸入にあつたことも、フェニキヤ人と同じ立場となつた。そのほか、眞珠、寶石、織物などをさかんに取つたものである。その中でも特に注意のなされねばならぬことは、支那から



の絹織物の通商も、ユダヤ人の手に負ふたものである。これには、その當時、支那本土に植民をしてゐたユダヤ人との間に連絡がなされたものとさへ思はれる。ユダヤ人は絹織物貿易に於て、西方諸國で重用な役割と信用を受けもつたことであつた。この東洋貿易は、サラセン帝國の樹立に依つて、ますます旺盛をきはむる所となつた。サラセン帝國に於てはユダヤ人に、至るところで活躍する場所をあたへられたからである。自己の船舶をかつて、インド、支那との連絡をはかつたところであるし、インドの香料、アラビアの藥品、コンスタンチノールの肩掛など、はなやかな世界貿易にたづさはつたものである。それらの各地には、ユダヤ人の居住地があつたことも思ひやられるのであり、決して世界貿易がヨーロッパ人に依つて始められたのでなく、フェニキヤ、ユダヤ人などによつて、すでに何千年の前から始められてゐたものである。かゝる状態におかれてゐたから、ユダヤ人は世界情報をあつめるに適當な地位にあつたと言へよう。今日に於ても、ユダヤ人が世界事情の諜報者として、にくまれやすいところにも、同じやうな論據がみられる。それには、サラセン帝國に於ては、ユダヤ人が統治者の顧問役として入りこんでゐたからであるし、現今に於てもユダヤ人が、政治機構に参加してゐるところから、かゝる重要性が見られるものである。そんなところからして、英米はユダヤ人の世界經濟を利用してゐる立場にある

のだが、反對に利用されてゐるとも見られるときに、ユダヤ人の勢力は、まさしく恐怖感をもつて、われ／＼にも差しせまつてくるかも知れない。たゞ、ドイツ國が憂へてゐるにとゞまるまい。しかし日本國ならば、ユダヤ人問題に對してもヨーロッパ人のやうにいだいてゐる偏見をもつて、のぞむ理由がないから、それ相應に活かしてやることが出来る。しかしユダヤ人には、東洋的な「したしみ」が、かなり持てるものだから、わが國に向つては、到底矢をひくことが出来ぬだらう。ヨーロッパ人より早く「まつらふ」性質があるかも知らないと思はれる程だ。

近代にはいつてからの世界通商の裏には、きつとユダヤ人がゐるところだと申される。スペインが世界發展をしたところにも、つゞいてオランダがなしたところにも、すべてユダヤ人の商人と連絡をたもつてゐたところであるし、イギリスの今日あるも、ユダヤ人の通商、金融能力に負ふてゐることを認めねばならない。また、アメリカは、あたらしいユダヤの國として、あらはれつゝあるのだ。かゝる經濟・通商金融に大勢力をもつてゐると言ひながら、ユダヤ人はどこまでも卑屈であり、さまよへる民族であり、あはれむべき存在にしか過ぎない。やはり、あたりさりのない「かうもり」の生活法をえらんでゐるに變りがない。かれらが世界を指導するとか、世界に「ところ」を得せしめるとかは、到底出来ないところだ。パレスチナにユダヤ國の再建をゆ



めみてさへ、その實現に苦しんでゐるのだ。

もしか、英米國がユダヤ人に支配されてゐるものだとしても、まぬがれるものは、わが國の正しき「こゝろ」に依つて、たゞされる所となるまでだ。むしろ、ユダヤ人運命は、いつまでも憂愁にとざされてゐるだらう。わが國の「おほみいづ」に依つてはじめて生かされうるところとならう。いまだ、いづこの國に於ても、ユダヤ人は正當なる人間として生きる喜びを見出したことは一日ともあるまい。その神話をみても樂園から追放される宿命を以て人間生活がはじめられてゐるのだ。

ユダヤ人の迫害には、三段階の経過をたどつたやうであるが、勿論、その三者とも常につながり合つてゐることは争はれない。しかし、總體的に見てくると、この三つの色づけが區別されると思ふ。その第一は、宗教上からの排撃であり、太古にあつてユダヤ人が受けた迫害は殆んど、この論點からひろげられた思ひがする。たとへば、エジプトからの追放も、やはり同じことだと言へる。エジプトのヘリオポリスの聖堂の僧として、フトレミー時代の王宮記録係だつた、マネソーは、ユダヤ人の追放は、まさしく、瀆神と宗教無視から起されたものだと言つてゐる。即ちユダヤ教のみならず、セムの宗教が偶像崇拜にむかつて敬意を拂はぬこと、及び、他國の宗教を

無視しがちであつたことは、古今を通じての通弊である。かかる問題は、近時の我が國に於けるキリスト教にも、それに似た問題を惹きおこし易かつたところからしてもうかがはれる。ローマのチベリユウス時代に於て、ユダヤ人攻撃者として知られるアピオンもエジプト人であつた。アピオンは、マネソーの理論を尖鋭化し、ひろげのべたところが見られる。人種上の反感は、ユダヤ人が癩病患者の本家本元だとさへ見る程である。アピオンに至つては、ユダヤ人の聖休日「サバット」と言ふ言葉の語源は、こんなところに關係があるとさへ説いてゐる。かれらは業病のため、六日間さすらひの旅をつづけるとも、その七日目には、業病のくるしさのため、休養を餘義なくされたと言つてやじつてゐる。しかし、ユダヤ人業病説は、ながらく、ヨーロッパ人心のなかに支配してゐるところとなつてきた。中世紀における黒死病が、ユダヤ人の手に依つて行はれたとて、ユダヤ人區劃が焼打、破壊にあふところとなり、ドイツだけでユダヤ人町が三百五十も襲撃せられるところとなつた。すなはち、ユダヤ人の秘密性が、他人種に安心をあたへないのである。そこから、この病的なものと結ばれやすいことになつたのだらう。また、ユダヤ人が、他人種の肉體を犠牲に供するとの噂は、中世紀のみならず、近代に入つてからも、ユダヤ人排撃の一大原因となつてきたものである。ロシアに於ける大迫害の依つてくるところにも、やはり、こ



んな心理に支配されてゐる。即ちユダヤ人は、聖日のパンにキリスト教徒の血潮を混ぜて作るの風評からである。また、ハンガリーに於て、行はれた迫害にも、やはりキリスト教信者の娘を誘拐して、殺害したとの風説からである。これらの風説はすべて、その宗教儀禮の特異性から、かもされてきた所が多分にある。

第二の要因は、その経済的な獨占から由來するところのもので、その鬭争は、現今にまでつづけられてゐるところのもの。すでに、ギリシヤ人は、ユダヤ人の商業發展にむかつて少なからざる「ねたみ」どころを覺えたところのものであつた。近代に於ても、ユダヤ財閥を打ちやぶらうとして、勇敢に戦つたものが幾らもある。その中でも、ポール・ボンツウの活動を擧げうる事ができる。かれは、フランスのユダヤ化を救はんとして立ちあがつた金融家である。もともと、ロツシイルド財閥の雇員であつたが、その解雇せられると共に、ユダヤ財閥と新教徒との連絡活動を打破るとの大きな方針のもとに立ちあがつたものである。その支援には、カトリックと貴族からの力にあづかつたもので、ことにローマ法王からの力添へもあつたのであるが、二五四二年には、二億一千二百萬フランの借財と共に、くすねはてねばならなかつた。すなはち、ユダヤ財閥からの包圍撃滅にあつた一例なのである。しかし、こんなところから、フランスに於ては、ユ

ダヤ排撃が貴族、カトリック僧の間から、おこされるに至るところとはなつた。

第三は、ユダヤ人の國際主義に對して、傳統的な國家主義との對立、衝突であり、これほど、國民の感情をそりたてるところの要因はなかるまい。すなはち、近代に於ては、政治運動として發展したものであり、最後には解決點のない人種問題にまで展開しつゝあるところのもの。すでに古代ローマにあつて、かかる議論が見られるところで、キケロも、そんな見解の上に立つてゐる。ユダヤ人が、ローマ帝國の傳統に侮辱をあたへつゝあることを憂へてゐる。ことに、ローマ時代に傑出した歴史家タキツスは、ユダヤ人のなしつゝある侵略工作を、はつきりと見抜いてゐたところのものであつた。ユダヤ人の習慣法は、あきらかに他人種を敵對視してゐるものであり、憎悪と反感をあふりたてるものだと言へ、その信條の第一義とせられるところは、他國の神々をさげすみ、故國を見捨て、父母子のつながりを忘れしめるものだ、恐るべきユダヤ思想をえぐりだしてゐるところであるが、いつの間にか、そのローマ帝國も、セム文化に乗りとられるところとはなつた。

近代に於けるセム文化及びユダヤ文化排撃は、ドイツ國を中心として起されたものであり、その理論は、ヨーロッパ各地に於て、支持を受けるに至つたところである。もともとドイツには、



自由文化を尊重する精神が、古來、多分に保たれてきたものである。中世紀に於ても、ローマ文化、カトリック的なものにすら反感を持つてゐたことであつて、遂にルーテルの新教宣言となつてあらはれたところでも分る。その後、近代國家に統一づけられるに進んでくるにつれ、國家意識はますます強められるに至つた。そこに民族の固有性、貞操性を無視したところの、セム文化と衝突をしなければならぬ羽目にあつたのであつて、もはや、單なる中世紀に於けるやうな、キリスト教に對するユダヤ教の闘争ではなくて、ドイツ民族の持てる本來の固有性と、容れるか容れないかの問題に歸着するやうになつた。それゆゑ、ユダヤ教のみならず、キリスト教も一緒にひつくるめられて、排撃を受けるやうになる「わけ」があることだ。

しかし、この起りは社會上の「あらそひ」から、政治問題に結びついていつたところに火のもとがあつたことだ。二五三三年の經濟危機にあたつて苦しんだものは、一般ドイツ人であり、その中で澄ました顔をしてゐたのはユダヤ人であつた。そこは當然、うちこまれる大きな「すきま」が出来てゐたわけである。ドイツ民族の統一強力性を打ちこはしてゐるものこそ、ユダヤ人だと目にうつたのは當然なことであらう。新聞上にあつかふ好材料として取上げられ、ユダヤ人自身が賣行きをはかるために、この問題をあふりたてるところさへあつたのだ。それは、やが

て政治問題としては、ビスマルク宰相に取上げられるに至り、哲學者としてはヘーゲルから後押しを受けることになり、思想家では名高いニエーチエが支持するに至つた。その上、ユダヤ自由主義者に向つての反感は、ドイツ傳統主義者から歡迎せられるところとなつた。この動きを利用するところの宗教家、政治家があらはれるといふ具合で、ここに人種戰としての火藥庫は、いつかは爆發せせぬはおかない運命にあつたのである。この動きの尖端を切つた理論は、ウィルヘルム・マルと言ふ、名もなきハムブルグの新聞記者がものにした「ドイツ主義を下敷きにして、ユダヤ主義の蠱惑」といふ小冊子を二五三三年に發行したところに、ユダヤ問題が理論として取上げる火蓋をきつた。つづいてゼツプ博士や、デユリング博士がユダヤ人の性格とか、本質的なものを探りだすに移れるところとなつた。ここにユダヤ人問題は、ドイツ人種學者の一手販賣のごとき觀をなして現代に及ぶこととはなつた。この間に、二五四一年、ロシアに於ては復活祭の前夜にあたり、酒場の口論から、ユダヤ人迫害の火が燃えあがり、ワルソー、オデッサ、キエフなどのユダヤ人まち、百七十ばかりのものが襲撃せられるに至つた。そのほか、二七五四年にはフランスにおこされたドレイフユース大尉事件である。これらの事件の後には、ユダヤ人排撃のための、みにくい、いやしむべき「はかりごと」がめぐらされたことだといへ、ヨーロッパ大



陸におこされた火の手は、すでに鎮めることも出来ないものとなつてゐる。自由主義者の巢窟であるロンドンでは、人道主義上から非難攻撃を加へてきたところであるが、その火の手は、この度の世界戦争にまで、持ちあげてくるところもなつたのだと言へる。まさしく、國家を思ふものにとつては、ユダヤ問題は、深刻なる悩みとなつてうつたところであらう。

いままで「もつれあひ」を起さなかつたイタリア政府も、日本、ドイツと三國協定を結ぶやうになつて二五九八年には、この人種戦に乗りだして行くことになつた。すなはち、二五九七年以後に、イタリアに移住してきたすべてのユダヤ人は、特殊の事情をのぞいては、二五九九年の三月までには、「たちのき」を命ぜられるに至つた。ユダヤ人は、學校入學を取消されたのみならず、大學教授者も一掃せられるところとなり、所有權・職業を制限されたのみならず、ユダヤ人とイタリア人との結婚は禁止されるに至つた。

このころは私も滯歐時代で、なまなましいユダヤ人迫害の「ありさま」を目にしてきたところである。そこには、階級闘争の意味もふくまれてゐることなのだらうが、ヨーロッパ人の血潮の底には、眞實の意味での「なさげどころ」とか「あはれみどころ」と言ふやうなものが缺け、徹頭徹尾からの敵對視からかりたてられてゐたものである。人種戦はまつたく、人間の理性を奪ひ

とつてゆく惨忍な行爲に思はれた。かかる非業な難題を持ちかけるものは、つねに、ユダヤ人自身であり、ヨーロッパ人であることを指摘しておかう。それよりも、人をにくまない日本人の立場からするならば、「かんがへ」の持ちかたが誤まつてゐるのだといはれよう。大きく、ものごとを生かす「うつくしさ」に缺けてゐるのだ。獨占思想は、こんなところに大破綻をきたしてゐることだ。わが國の皇道は、大きく生かす道であつて、決して排他主義的な獨占思想なのではない。

## 4

ユダヤとして他民族からあなどられ、迫害を受けることは、心苦しいに違ひない。その根本原因は、自國のない悲しさなのである。ふたゝび、ユダヤ人の國を再建しようとの願ひは、今日に初まつたことでなく、ユダヤ教徒がつね／＼に感じてゐたことなのであつた。特に聖典には、ユダヤ救済主なるメシアの現はれるとき、全世界にさまよへるユダヤ人は、ユダヤ國に歸りきて、全世界はその掌中に歸すことを豫告してゐるところである。それゆゑ、ユダヤ人の心には自國再建の夢が、他民族にくらべて強力なものであるにかゝはらず、なか／＼、その實現のはかどらない状態にあることだ。近時どうか、その端緒につきはじめたと言つた所で、尙ほ、微々たるも



のだと言へよう。

すでに、われこそはユダヤ人の救済主だと名乗りを挙げたものも少くない。一三八九年には、セレネと申すもの、一八二〇年にはグビツド・アルホイなるものがあり、そのほか、かれらの同族を解放するものだとて、スペイン、イタリヤ、トルコのユダヤ人から熱狂的支持を受けた、ダビツト・リュウベニ（二二九〇年ごろ）の一派があるかと思へば、イギリスのキリスト教達のうちで、キリストが再臨して、一千年間地上の王になると信じる一派と協力して、イギリスにユダヤ國をつくつて見ようとしたメナセフ・ベン・イスラエル（二二六四年—二二二七年）なるものもある。しかし、サバタイ・ゼベイ（二二二五年—二二二三年）のごとく、各地のユダヤ人の心を惹きよせたものはあるまい。かれこそは、眞實の救済主だと名乗りでたものであるし、ユダヤ人達は、すでにパレスチナへ還りゆかうものとの準備にいそしんだが程である。これらの心理は、まさしく「さまよへるユダヤ人」の場合と同じことであらう。そのほか、ユダヤ人の政治家とか資産家にして、ユダヤ國をゆめみたものは、中世期の方、いくつもの氏名が列挙することが出来よう。しかし、こゝ七十年來、この運動はもつと、具體的な方法をとつてあらはれてきてゐる。ことに、近來のユダヤ人迫害運動は、自分たちの還りゆく故國を持ちたいとの心を取りた

てさせるのも當然なことであらう。恐らくヨーロッパ諸國とて、これらの恐るべき無賴者をごろ／＼さしゐることに心地のよい筈はない。出来ればアフリカでも、シベリヤでも良いから、政治力のあまり幅の利かぬやうなところにも、押しこんでやりたいのが關の山なのであらう。そこに色んな事情もからんで、ユダヤ人再建運動は面白い話題を幾つも提供してゐることだ。少くともユダヤ人の活動方法からして國家を持つなどと云ふことは、凡そありえないことである。勢々避難する場所を設けてやる位が力一ぱいのところと見える。しかるに、ユダヤ人の金持ちが多大の援助金をだすところには、みづから進んでユダヤ國の人柱とならうとはするのでなくて、體面上と人氣政策からしての偽善行爲だとしか受けとられない。近時にはいつて、パレスチナに於けるユダヤ人の人口が四十萬人位になつたと言へ、この位のことでは内容の充實した國家ができあがるまでには、前途遼遠と申すのが妥當であらう。二五九七年の調査によると、三十九萬五千八百三十六人となつてゐる。

ユダヤ人の國家建設にあつて、一番困る問題は農業の経験がないことである。曾つてユダヤ國のあつたときは、農業國民であつたことだが、現代では大地の耕作法を忘れはてた民族である。この點に於て農業の占める位置を充分に考察しておかなければならない。近時、國家は工業



國家でなければ、近代國家ではあらざるかの如き考へを植ゑつけられたことであるが、この工業資本經營の一點張りで國家は成立することはないと見て差支へあるまい。國家・民族の中心はどこまでも、農業に中心がおかれてゐなければならぬだらう。なぜならば、この生活法の中に初めて人間は、「おちつき」と「はぐくみ」と、心の「たかさ」を見出したのである。機械工業の世界の中には「うるほひ」とか「なさけ」と言ふものは湧きでてこない。そこには淋しい金屬の響きだけである。なるほど鋼鐵のごとき意志がうまれでて、世の中を齒車のごとく動かすことができるかも知れないが、つゞまるところ、人間が機械化になることであり、物質化するのが落ちである。せめて、人間の生きてゐる姿は、性欲、食欲からする動物面からの姿に侘はれる位のことだらう。近代における人間の缺陷は、この機械工業から受ける人生觀にひきづられることが屢々である。工業は、人間の集團生活をもつとしばりつけてゆくものである。わが國に於ても田舎から労働者が都市生活にながれこんで行つてゐる。次第に農業地にかへつて行くのを嫌ひはじめたやうにもなる。かつての社會主義運動のごときも、かゝる缺點から乘ぜられたところである。つゞまるところ、機械文明は人間の魂をはぐくむ道からそれやすいものとなさしめる。現代文明で東洋と西洋とを分つ、一標準點ともなることを得るであらう。東洋が精神文明だと言はしめる

のは、農業中心だからである。西洋が物質文明と名づけられるには、機械中心で進んできてゐるからである。これを言ひかへれば、ユダヤ人は商業で世界征服を夢みてゐたとき、ヨーロッパ人は機械文明にて、全世界をおのがものにしようと努力しつゞけてゐる。このとき、東洋は高き心すなはち徳を以つて全世界をなびかさうとしてゐることなのだ。

人間生活のたどつた方法に於て農業生活は、われ／＼の心をきよめ、深みのあるものとした。尙ほ地上には、放牧生活を送つてゐるところの種族もあるけれども、そこからは、すぐれたる文化がうまれでることはない。まさしく、人間の「とほとさ」が見出されたときは、農業生活の過程に於てである。國家の成立と農業生活とは、切るに切られぬ關係にある。家族生活、祖先崇拜もこの生活方法のなかに、うるはしく伸びそだつたと眺められるだらう。商業の發達は、都市の發達をうながしたことであるが、こゝには人間生活の美しさをくづしゆく色んな悪徳をかもしたにとゞまる。しかし、近代の工業發達ほどおそろしきものはあるまい。そこには限りなき人間生活の危険性をふくんでゐる。機械労働生活は、人間の「うるほひ」のある部面を抹殺しつゝある。たゞに健康上のことのみならず、この制度のかもしれない出す精神上の墮落こそ、もつとも恐るべきことである。機械文明に依つて、人間は動物にまで還元されつゝあることだ。國家生活は



いづこの國を問はず、農業生活を保護せずにはすまされまい。わが國に於ても、農業生活と機械文明とを調和さすところに眼目がおかれておなければならぬ。食糧増産とか、軍需生産とか、たゞ能率部面に氣を配られてゐるのでは、とんでもないことになる。

國家を經營するのみならず、眞實の意味での植民地經營は、やはり農業に主きがおかれておなければならぬ。ヨーロッパ人の植民地發展は、農業を第二義的に考へてきたところから、その植民地は、はなやかな割に地についてゐない。いつでも他國の統治にかはられるときは、跡かたもなく、吹きとんでゆくことにならう。その地方の人心を啓蒙さす意味に於ては、農業を共にする程、大きな和合をはかるものはあるまい。たゞ被統治民族から農産物を、機械製産品と取りかへしてゐると言ふのでは、殆んど心の交換がなされないと言ひうる。植民地經營が、ヨーロッパ人のごとく天然資源利用開發にのみ、意をとゞめしめたがごときことはなく、わが國の經營方法は「まつり」に中心がおかれねばならぬことは當然なことで、それには、その土地の農業生産および、人心とつねに密接な關係にならねばならぬことを思はしめるものだ。今まで日本人が海外發展に成功しつゝあつたのは、農業開發に中心がおかれてゐたと見なければならぬ。

ユダヤ人にとつて農業開發するにあつても、資金のことが問題になる。アラビヤ人はユダヤ人より使ひ易くて資金も易いことなので、土地開發をアラビヤ人に待つと言ふ風であつた。しかし、ユダヤ人の國をたてるに他國人に頼つてゐるのは良くないとのことで、エリマンからのユダヤ人をさかんに移入したものである。こんな風ではユダヤ再建と言ひながら、多分に宣傳廣告、政治的野心が動いてゐることは見逃されぬ。ことに、この土地へ流れこんでくるユダヤ人には老齡期の者が多く、國土開發に必要な青年の缺乏になやんでゐたことである。二五七〇年、オデッサをたつて、パレスチナに向つたユダヤ人の二千人の中で三割の者が五十歳以上であつたと報告されてゐる。二五七二年にジャファの港に到着した東ヨーロッパからのユダヤ人は、二千二百八十人に及ぶが、その中の三割が、やつと三十歳以下の青年だつたと、ナブラツキ氏は報告してゐる。しかも、ナブラツキ氏は、つぎのとき内情を報告してゐる。二五七二年にジャファ港に到着した青年は、六百八十四名であるに、この港から海外へ出ていつたユダヤ青年は、七百九十人に達してゐる。これでは、一國再建だとは遠い夢のことかも知れない。しかし、ユダヤ人富豪の獻金は少からざるものがあつた。エドモンド・ド・ロツシールドは、五千萬フランの資金を投じて土地開發に熱意を示し、ヒルシユ男爵が投じた資本は、一億六千萬マークに達するものである。これらの資金を喰ひものにするために、集まつたものも少くはなかつたであらう。



ユダヤ再建運動は、有名なヘルツル運動を契機として、全ユダヤ人の人心を煽動するに至つたところである。ヘルツルは、二五五五年までは名もなきウィーンの新聞社の新聞記者として、パリに滞在中、「ユダヤ國家」(ユードンスタート)なる小冊子をあらはし、さまよへるユダヤ人の悩みをとくには、どうしてもユダヤ國家の再建を力説したところである。この小冊子は知人の間のみ配り、一般に擴める意志はなかつたのであるが、各國語に翻譯され、全世界のユダヤ人の手に渡つたのは、二五五六年のことであつた。やがて、ヘルツルは、ユダヤ再建運動の旗頭にまゝりあげられ、第一回の會議が二五五七年にスイスのバーゼルに於て取行はれるに至り、會するもの二百四名であつたと言はれてゐる。その時の決議がパレスチナの再建につれ、ユダヤ人の意識の強化及び、各國政府との連絡などの仕事を目的とするものであつた。ヘルツルはイギリス政府に、土地の提供を迫つたところ、二五六三年に、アフリカの無人島高原六千哩平方の土地を與へようとの申出があり、全ユダヤ人がこの好意に感激したことである。しかし、受けとつてよいか、どうかに至つて、議論、見解が分れるところとなり、遂に受取らないことに決定をみた。そこで受取ることを主張した一派は分裂することに及んだのである。しかし、最も大きな痛手を蒙つたのは、二五六四年ヘルツルが死亡したことであつた。その時からもユダヤ國家はパレスチ

ナの土地に限定するか、どうかについても意見がまとまらなかつたが、行動派として知られるユダヤ人達は、パレスチナの土地に二五六八年のこと開拓事務所を設くるに成功し、それ以來、ユダヤ再建の土地は、パレスチナに決定したやうな方向をとつて進んできてゐる。ことに最も心底の見え透いた手が、イギリス政府に依つてなされるに至つた。それは前ヨーロッパ戰に際して、ユダヤ人の援助を受けるは、戦局に影響すると見てとつたイギリス政府が、イギリスの富豪ロスチャイルドにユダヤ國家再建に援助を惜しまないことを手紙で通知したことで、世にバルファ一郷の宣言と申されてゐる所である。その手紙の文句は、まさしく甘つたるい言葉で書きつらねてある。もしか、この宣言をユダヤ再建者聯盟のみとむるところとならば、われは感謝に耐えぬの言葉で結んでゐるものだ。これは戦局を有利に導びかうとしたイギリス政府の常套手段なのであつた。しかし、大戰が終末を告げたときは、バルファ一郷の宣言を有効づけるに責任を持つとの、逃げ言葉で終つてしまつてゐるのである。これは、ユダヤ人より、イギリス政府が一步、上手の感むがすることだ。どうせ土地を開拓してもらふならば、パレスチナのごとき不生産の土地が、あつらへ向きと見たからであらう。ただ國家感情に驅りたてられたものが、大きな資本を注ぎこんで、その果ては、殆んど得ることのない「ものすき」に終ることになりまつてゐる。ドイツ



地理學者フイリツフツン氏は、地中海地域の諸國と較べあはせて、パレスチナのごとき、石ころの多い土地では百二十萬人以上の人口を包擁し切れないだらうと推算してゐる程だ。百二十萬人と言へば、ひとつの都會の人口に相當するものである。しかし、それに反對するバヤツ下氏のごときは、六百萬人位を入れることは出来ると申すのだが、つづまるところ机上の計算にとどまらぬに過ぎない。いかにか國家再建といふことになるかと、むづかしいものかと分るべきである。散らばつた民族を一場所に呼びかへさうとするのだから、ユダヤ人の惱みは大きいのだ。どうしても國家が成立する根本條件としては、民族が散らばらずに一地域に集まつてゐることが必要である。その點からしても農業の大切なることが重ねて言ひ得られることと思ふ。農業生活に依つて、初めてその生れた土地に大きな愛着をもちあつてゐるのだし、血の「つながり」が強き結びをなしてゐることになるのだ。血の「つながり」が行きわたるのでなければ、民族の結成力が底力から強いものとは言へないだらう。ユダヤ人は、すでに世界各地をさまよふことが久しく、血の「つながり」は、ばらばらになつてゐると見なければならぬ。ユダヤ人が人種として、單一性であるかどうかと、よく問題となるところであるが、すでに色んな本が説きあかすが如く、複雑なる分裂状態にある。たとへばユダヤ人には名高い「ユダヤ人の鼻」があるが、事實はかかる

鼻の持主は、わづかな率をしか承してゐないことが統計にあらはれてゐる。すでにプロンドのユダヤ人をエトロツパに見られることで、イギリスのユダヤ人の三割五歩をしめ、ドイツに於てはユダヤ人の三割に及んでゐることも想像がつく。従つて、黒髪の色を國に於てはプロンドのユダヤ人などは見られないことになる。頭蓋骨の係數に於ても、各地に依つて相違をきたしてゐることで、すでにユダヤ人種としての單一性を失つてゐるとみることが出来よう。さまよへるものは、かくして墮落しゆく経路をたどつてゐるのであつて、責任觀念に乏しくなつてくるのが當然であらう。性生活にづらづらしいユダヤ人として嫌はれる原因ともなつてくるところである。ユダヤ人國家再建のところには、血の「つながり」の觀念も強調されてゐるところだし、パルゼル第一回決議文にも「ユダヤ人の感情と意識」を強化するといふことは、明らかに血の純潔保存につながるべくとるべきとも見られる。しかし、ユダヤ人は、血の「つながり」に向つて、餘り敏感でなかつたことは、その結婚に際し、他人種と平氣で混ざりあつてきたことである。ユダヤ人同士の結婚に對して、他人種との結婚の割合は、二五六年から二五六五年に至るまでのハムブルグ市の事は、四割九分五厘をしめしてゐたものだし、ベルリン市に於ては、二五六五年に四割四分四厘を示してゐたことに於ても、ドイツ國に「純血運動」がおこつてくる原因があつた。



しかし、この傾向は年々、増加の道をたどつてゐたもので、ヨーロッパ戦後のことき経済力の疲弊したときには、その弊害の恐るべきものがあつたことは想像するにがたくない。ユダヤ人の魔手に、ドイツ人の處女達がもてあそばされた悲劇は至るところにあらはれたことだらう。ユダヤ人への復讐が激しさを極めてきた感情には、こんな裏づけのあつたところも見のがされぬ。ユダヤ人は前例を見ない苛酷さで、ヒットラー政権から追放をくらつたのである。パレスチナ建設も、前ヨーロッパ大戦のまへには遅々として、はかどらなかつたが、大戦後はかなり順調さを取り戻したことである。ことに、若い青年を留めるには、學校設備を充實せねばならぬところから、パルファア郷は、エルサレム大學を二五八三年に創設することになり、この大學に於ては、すべての用語がヘブリエウ語であることは注目に値する。どうしても心の純潔をたもたうとする上には、民族本來の言葉にかへつてくるところで、言語政策と民族運動は、つねに離すことのできない関係で進んできてゐるものである。言葉の純粹化は、民族精神の純粹化と並行して突きすすんでゐる。それゆゑ、言葉のくづれることは離婚の前兆であり、離婚に依つて、言葉がかはるとさへ言はれることになる。これらのものは互ひに連絡しあつてゐるところに、尊い生命の「つながり」を想はすことだ。ユダヤ人だとして、同じ方向をとつて建設に向つてゐる

ことが分る。現在では、パレスチナ地方の日常用語も、ヘブリエウ語が用ひられることになつてゐる。その他、ユダヤ人再建運動にもなつて、設備・機關もとのつてきてゐるところで、ハダサ醫療協會は、二五八七年には四つの病院と三十一の診療室と、ひとつのレントゲン研究所をしつらへるに至つてゐる。前大戦後、二五八七年までに、世界各國のユダヤ人から、パレスチナに得た同情金でも、一千万ポンドを下らないとされてゐる。前ヨーロッパ大戦前は、九萬五千人に達しなかつたものが、二五八五年には十萬八千人となり、それから二年した二五八七年には、十五萬九千人に増加したことであつた。ユダヤ人の所有地も大戦前、百七十七哩平方のものが二五八七年には三百九十哩平方となり、農耕に従ふものも一萬三千人から三萬人に及ぶことになつた。近代設備の都市として成立したテル・アビブの町にも、その年には、三萬七千人に及んでゐたところである。かかる發展は、パレスチナに根をはつてゐるアラビア人と鬭争する機會を多く與へることになつた。二五八九年には、ユダヤ人の大切な聖地をめぐるつて、所有權の「あらそひ」が起り、百三十人からのユダヤ人は殺害され、軍隊出動を見るまでになつた程である。故國の土地だと思ひこんでかへつてくれば、思はぬ他民族と「もつれ」を起しあはねばならぬ運命が待つてゐたことである。この度の世界大戦をめぐるつて、これらの民族の「もつれ」はあたらしき面相







## 1

ヨーロッパ歴史はしまつてこのかた、最大の闘争であつた前ヨーロッパ大戦に於ては、同盟軍の敗北に終つたのである。ドイツ國土の週邊は、わりさかれ、千三百二十億金貨マルクの賠償金はあてがはれることになり、軍備は制限せられるに至つた。その上、辛苦して獲たところの海外植民地は一時に失つてしまつたのである。二度と立ちあがることのできない「くさり」にしばらくつけられた制度こそ、ベルサイユ條約體制なのであつた。このつながれたドイツ國が、こゝ數十年のうちには立ちあがるなどと、だれが思ひついたものがあらう。しかし、ドイツ人の魂は、敗北してゐなかつたのである。ベルサイユ條約を聞いたとき、悲憤は胸ふかく刻まれてゐたのである。民族の魂は、いつの間にか、實力となつて燃えあがつてくるのだ。さすがのベルサイユ條約體制の「くさり」も十數年のうちに、たちきられるに至るほどの實力と請求權をとりもどしたのである。近世史に於て、いな世界史に於て、ドイツ國のごとく短時日に、驚異的な進展をとげた

民族運動は、みられなかつたところである。それは、よみにじられたものに、正當なる權利として與へられた「あだうち」の任務なのであつた。その「あだうち」の目標は、まづ失地回復と、軍備制限撤廢に向けられてゐた。ドイツ國へ一歩足を踏み入れたとき、民族意識のわきたつてゐる湯釜の中になげだされた感じがした。この湯釜の中にあつて、若ものゝ心は、にえくり返る情熱を覚えしめられた。ハイル・ヒットラーの聲は、いまでも耳もとに嵐のごとく、あられのごとく、ひびきあふぶを想ひだす。幾度となくラジオから洩れる報知のまへに、涙にむせぶドイツ人達を見たことであつたらう。この魂があつたればこそ、今日の世界大戦を惹きおこすだけの勇氣があつたのだ。「たゞしさ」のまへに、感激と「いきどほり」を失つたやうな精神萎縮者であつて、どうして今日の大業がなしとげられようか。ドイツ青少年のごとき感激の熱狂性をみならぬ必要もあるまいけれど、それにも劣らぬ正義への熱情を失つてはなるまい。この度の英米打倒の戦争こそ、世界歴史に於ける最大の正義の「いくさ」だからである。さいはひ、ドイツもイタリアも、わが國の「みこころ」に沿つて、勇敢にたゝかつてゐる現在である。このドイツ民族が、今日のごとき切札をきらねばならなかつたことは、たゞの一次的なことに依つてゐると思へない。ものと本質的な民族問題とつながつてゐるところだらう。



問題は、ヨーロッパ大陸に果してゐるドイツ民族の使命は、古代以來、あまり變つてゐるところがないやうに思はれることだ。その觀點については、色々の「みかた」が、出来ることであらうが、その中の二三をひろつてみることにする。ドイツ民族は、いまだ、かつてキリスト教的なヨーロッパ文化に感染したとは見られない。つねに太古以來からの民族的なものを失はずに、現代までに立ちいたつてきてゐることだ。ことに、ルーテルに依つて推きおこされたカトリック教への返逆に依つても、あきらかに、その過程が見られる。このことは、ユダヤ人排斥と共にキリスト教をもしりぞけようとする今日の動因にもつながつてゐることだ。キリスト教、ヨーロッパ文化と云へば、ローマ帝國の勢力圏に歸屬した範圍をさすことが出来るだらう。今日の自由主義國とみられてゐたイギリス、フランス國のときは、ローマ帝國化された土地なのである。即ちローマ軍に依つてふみにじられた土地であり、その軍隊の駐屯によつて、ローマ文化の曙光を受けとつたところである。しかるに、ドイツ民族のみは、古代にあつてしぶとくローマ軍とライン河を狭んで對立しつゝけたものであり、むしろローマ帝國を打破するに至る軌道に乗せたものである。それゆゑ、他民族から負かされたことがないとの自負心は、今日に至るも強烈である。前ヨーロッパ大戰に於ても、寸土たりと言へども敵軍の思ひに任せなかつたところである。こゝに

は強烈なゲルマニヤ民族時代からの精神がながれつゞけてゐる。ローマの史家タキツスが書きとゞめたがごとく、その主人のために身命をさゞけて戦ふことが最大の誇りであつた民族なのである。それゆゑ、世界主義的思想文化に向つては、あくまで手向ひ、たゞかひ續けきたところであつて、前ヨーロッパ戦争以後に英米の自由主義をひよつくり排撃したり、全權主義の打破に全力を傾けだしたりしたのではなく、ローマ帝國時代に受けもつてきたところの使命を今日と言へども遂行しつゞけてきてゐる。まさしく、各民族の受けもつてゐる使命が、時代に依る千變萬化があるとも、古代以來、それをはつきりと言へば、神話時代からの使命と同じものにつながつてゐる。そこに亡ぶことのない民族の魂とか、民族力なるものが想ひおこされることにならう。

かゝるところからヨーロッパに於ては、南方民族がいまだ、北方民族を完全に負かしきつたこととはなかつたのである。それゆゑ、古代以來、北方民族と南方民族とは、はてしなくあらそひつゞけてゐると見るのが妥當であらう。ヨーロッパ中世史は決して、カトリック教國を現出したものと見ることはできぬものと思ふ。たゞの北方民族と南方民族との「なれあひ」が中世紀をたもたしてゐたので、北方民族が南方文化に屈服したことは、曾つてなかつたのだ。地中海沿岸の物質文明と、北方精神文化とは、たがひに融けあふべきものより「はねあふ」素質を多分に持ちつ



つけてゐたことである。いつかは分裂争闘を初めるものであつたことは、ヨーロッパ文明史を見るとき、ひとつの「ながめかた」をあたへるだらう。歴史はめまぐるしく民族のもてる本質的なものを失はしめ、次から次へと、とりかへて行つてゐるものではない。むしろ「かはらぬもの」を受けつたへていつてゐるところに、その役目があるとさへ思はれる。では、なぜに中世紀に於て、北方民族と南方民族とが、なればねばならなかつたかと言へば、ヨーロッパ大陸をおびやかすものにもかつて、共同動作を採らなければならなかつたのだ。すなはち東方から打ち寄せる民族の波には、各個單獨には守りうる事ができなかつたのである。萬止むを得なかつた形態がヨーロッパ中世紀の歴史を形づくるのであつて、これを以てヨーロッパが單一的な文化形態をたもち得てゐたと見るのは、むしろ淺はかである。それゆゑ、一度び東方からの壓力がゆるんでくると、ヨーロッパの「なればねば」は、わかればねばならぬ運命にあつたのだ。ドイツ國が北方的なものを受けついだとき、フランス國は、南方的なものを受けついだ、こゝに對立、敵視あはねばならない近代史が初まつてゐたのだ。前ヨーロッパ戰も、現在行はれつゝある世界大戰も、ヨーロッパを受けつがれてゐる、この宿命的な「あらそひ」が進展していつてゐるに過ぎない。かゝるところからしても、現在のドイツ國文化指導者たちが、ドイツ民族精神の立場を北方に求

めてゐることが納得できることになる。北方には、いまだ南方文化に依つてけがされなかつたものが、いろんな形の中にたもちつゞけられてゐる。すなはち、風俗、習慣はもとより、童話とか神話のなかに、その北方的なものが、かゞやきいでてゐるのだ。ことに、その神話のなかに、けがされなかつた「北方だましひ」を深め、きよめようとする運動が、力強く盛り上つてゐることで、ユダヤ人、セム文化、キリスト教排斥などとながつてきてゐる。ドイツ國は、この北方的なものをもつて、ヨーロッパの全體統一をはからうとしてゐるものであり、今日のドイツ民族學をつくらしめる原因ともなつてゐる。そこに至るまでには、なほ、さぐるべき「よりどころ」があるやうに思はれる。

それゆゑ、ローマ時代からドイツ民族を野蠻視する傾向がたもちつゞけられてゐた。現代に至るも英米人からは、完全に野蠻視されてゐたことだ。熱烈なるヒットラーの國土、自民族をおもふ熱情は、英米國からは「きちがひ」扱ひの論評さへ受けてきてゐるのだ。英米文化はすでに、「たましひ」「こゝろ」の清らかさ、すなはさが、物質的なものよりも、まさつてゐることを忘れてしまつたのだ。言ひかへれば實力と實權さへをにぎつてをれば良いのであつて、すでに道義的なものを失ひはててゐるのだ。英米人の道德觀念には、貞操觀念がうしなはれてゐるのである。



これらの文化には、心と心をもつて「ちかひあふ」神聖さを見失つてゐる。結婚のごときも、ただの「なれあひ」便宜的なものとか、かんがへてをらないがごとく、平気で「はなれあふ」が如き思想がゆきわたつてゐる。これを以て、現代文化の尖端をゆくものであるとすれば笑ふべきことだ。こゝに、ヒットラーが旗頭となつてかゝる英米思想が、ユダヤ人に依つて策動せられてゐるものであることを、あぐりだし、痛烈にいぢみかゝつてゐるところだ。そして、家族、自國民族の國土が大切なことを説きつゞけることは當然なことであらう。野蠻だとのしられて、その、しからざるものでないことを、身をもつてさしめしつゝあるのである。だから、ドイツ民族學が、ことさら、北方民族の優秀にして他民族から異なれることを主張しなければならぬ「わけ」があるところである。たしかに現代のごとく、文化程度がひらけた時代に於て、他民族を劣等視することは、あまり立派な民族政策とは受けとられない。そこをねらつて、英米人側が「きちがひ」扱ひにするところともなつてゐるが、あの大戰後に弱りきつてゐたドイツ民族をゆすぶり動かすには、どうしても、この強い自意識をとりかへさねばならなかつたのである。強度の注射材のごとき理論と實行とが必要なのであつた。

他民族を野蠻視がちになることは、いづこの國民だとしてなしやすいところである。また、みづ

からを野蠻視して満足してゐるやうな國民であれば、すでに立ちあがる氣力を失なつたものである。この野蠻視にむかつては、はつきりとした見解が必要である。わが國のごときも、英米人からは多分に野蠻視されてきたところのことだ。その、ひとつの「よりどころ」に生活程度が問題にせられてきた。その點、經濟生活のすぐれた英米人を、すぐれたが如くに錯覺を起しがちであつたが、現在に於ても、かゝる錯覺を頭の隅つこにしまひこんでゐるものがあるかも知れない。生活程度を以つて野蠻視の標準とすることこそ、物質文明の餘弊である。物質とか「そとがは」のことであつて、本質的なものゝことではない。民族力の優劣を決めるものは、物質力のはなやかなることによつて決定せられない。むしろ、今迄の歴史觀は文明國が蠻族によつて、打倒されるのが通例のごとくに思ひこんでゐるが、これこそ、うはすべりの見方である。蠻族こそ、かゝる文明國よりすぐれてゐたればこそ、打倒しうるに至つたのである。劣つてゐるものが、すぐれてゐるものを倒しうる「わけ」がない。生活程度を「よりどころ」とするところには、「こゝろ」の大切な役割が説かれてゐない。一致協力して他民族との闘争にあたりうるものは、つゞまるところ「こゝろ」の團結がつよいところに歸するのである。この野蠻視の傾向は、普通の「よのなか」にも行はれてゐることで、人間評價に際してもよくなされるところだ。即ち「ものもち」と



か「ものもちでない」かに依つてその人に向ふ態度をあらためる、いやしい「こゝろつき」がそれである。人の「たふとさ」はまづしくあるとも、その心の氣高いところに「ねうち」があるのだ。わが國のごときは、まさしく、この見方のうちに國民生活がきたへあげられてきたものである。そこにこそ、日本國の躍進する原動力があるのだ。しかるに、今さら、相手の生活程度が高いとか低いとか申すのは、最の骨頂である。もしか、英米的な心もちが派生するところならば、かゝる卑しい心つきの中に芽ばえでることだらう。政黨政治のはなやかなりしころの、ものゝ見方と言ふものが、ほとんどかゝる物質觀に依つてゐたればこそ、賄賂事件をしきりにひきおこしたことであり、國民から遂に葬り去られるに至つたのだ。國民のいづこに、かゝる力づよき批判力があつたことなのだらう。それこそ、日本精神の氣だかさに依つてくるところである。わが國の都會地には、すでに英米思想に依つて、頭のぐらゝしたものが寄りあつまつてゐたところである。戀愛とか、金權とか、立身出世に浮身をやつしてゐた徒輩のあとがれの土地であつた。そして、それらの者は、田舎者を生活程度の低いものとあざわらつてゐたことであつた。ところが田舎の土地にこそ、現代のたらしなきものに痛烈な反響をくらはす力が貯へられてゐたのである。國を動かすものは經濟とか物質とかでない。つねに高き心をいだいてゐる國民に依つて動か

されてゆくものである。

現代、ドイツの有名なる民族學者ギンター・クラウス氏などに依れば、かゝる氣高い心、性質は、北方民族の特質であつて、北方民族にだけゆるされたる特權だとして理論づけようとしてゐるのである。即ち、世界に於ける高度の精神文化をきづきあげたのは、すべて、ヨーロッパ北方民族、それを言ひかへれば、アリアン民族、それを具體化せばプロンド種族に依つて形づくられたと見ようとするのである。世界のすべての高度の精神文化は、このプロンド人種の血し脈を分つところになされたのだと言ひ、近ごろになつては、支那や日本文化の中樞をも、きづきあげてゐるものはアリアン種だと言はうとしてゐるのである。たしかに、ドイツ民族の絶對優秀を言ひはるためには、あつらへ向きの學說であり、ドイツ人が世界文化をきづきあげたと言ふのである。これは今迄、ヨーロッパが世界文化の源動地であつたと言ふ説を一步、前進させたものであり、かのギリシヤ文明とて、イタリヤ文明とて、すべて、ドイツ人の血し脈の参加に依つて、はじめ成し得たのであると言ふのだ。なるほど、これらの本を讀むと、さうかなと思はしめ、世界文化の根源は、ドイツ人に依つてなされてゐるのだと意識づけしめることだ。近來、わが國に於てもこれと同じやうな學說が、はびこり勝ちとなつてきてゐるが、こゝには慎重にわが國の立場を



考へなければならぬ。わが國の「なりたち」は、かゝる狭小なる見解のうち成りたつてゐる國柄なのでない。いづこの民族であらうとて、心をひるがへして日本國の「まつりごと」(政治)に力を致すものは、大君の「みいつ」にあづかりうるのである。たゞ目が青くて頭髮が黄金色をして、皮膚の白きものゝみが、世界統治能力にめぐまれてゐて、他民族は劣等民族であり、被支配を受ける宿命にあるなどと、ほのめかしてゐるのと異なる。無理をして世界を「わがもの」にしようなどと意識して進んできた「あとかた」はいづこにもない。實に、なるところを生かし、最も尊いものにしあげてゐるところに、日本國の悠久にして迫らざる大きな力が、あらはれでゐる。たとへ、ドイツの學説が事實にしたところで多分にユダヤ人の選民思想にとつてかはり、科學的に具體的にしめさうとしてゐるものだが、自民族中心の小さな限定から離れてをらない。今迄、英米がいな、ヨーロッパ文明がたどつてきた道すぢは、すべて「自分よがり」の立場にしがみつてきたのである。こんなことで、どうして他民族を生かし動かすことができよう。わが國の「衆生心」とか、「菩薩心」とかは、そんな小さな立場と「くらゐつけ」を異にしてゐる心地がする。要するに、ドイツの學説には、尙ほ、ヨーロッパ的の偏見が濃厚にたゞよふてゐる。これで、世界統治の理論を形つくらうとしても、他民族から「ものわらひ」の種ともならう。すく

なくとも、他民族をして「ところづけ」をなさうとするやうなものが、自個を言ひはるやうな小さな心つきであつてはならないのである。世界統治が實現するには、日本の「みち」までかへつてこなければならぬ運命にあることだらう。

民族の發展は、心の「ひきしまり」を缺いでは、決してなされないだらう。ドイツ國は、この精神作興にあつては、民族危機の思想を以てあたつてきたことである。まさしく、ドイツ國は存続しうるかどうかの道をすゝんでゐたことであつた。この際、英米のごとき享樂思想にふけてゐれば、ドイツ民族は、瓦解するに至ると見ぬいたのである。この瓦解を防ぐためには、強硬手段で國內整理にあたらねばならなかつた。これは、外部に向つて發展をとゞめられたドイツ人の精神萎縮を救ふために、最も適切なる手段であつた。即ち、ユダヤ財閥の抑壓、ユダヤ文化の排斥、ユダヤ人の迫害などに依つて、ドイツ國本來のものを強め高めることであつた。ドイツ人の自意識をはつきりと保たせるためには、自民族の名前と血液の純正さを守る「ほこり」であつたことだ。言ひかへれば、英米の頹敗文化をしりぞけて、民族全體の興隆のために力をあはせてすゝむことにあつたのだ。それには生れでる子供には、國家から保護をあたへ、妊婦にむかつての特別補助をなすことなどに依つて、人口増殖の尊い使命を意識させたことである。英米文化は



個人思想をさかんにするため、婦人は受胎することを嫌ひ、また経済上のことから、子供を出生させることを、いとほしめるやうな傾向にさへあつたものである。わが國に於てすら、産克制限論をとらへるやうな、おめでたい人もあつたのである。民族の興隆と出生率の上昇とは、はなされがたい進行を保つてあるものだ。伸びゆく民族、伸びゆく民族の區別はまさしく出生率の多い少いた依つて、最後の決定権がさづけられてある所のもの。民族の發展は、決して、國土の制限とか、社會上からの抑制、食糧の多い少ないなどの外的條件によつて、決定づけられてあるものではない。かゝる制限をつねに打破つて、前進をしてゆくのである。植民の形式などは、民族興隆のひとつの「あらはれ」なのである。全ドイツ民族運動が、植民政策と共に發展していつたことについては、そのことが言はれうることだ。

米英の無秩序の國から、秩序整然としたドイツ國に、一步をふみ入れたときに、國民のおそろしき心緒へに驚かすには、をられなかつた。自己一身の満足と幸福とを追ふやうな夢は一掃されて、光榮ある自國民族のために、すべての「くみたて」がなされてゐたことである。青少年にいたるまで、自國再建・建設のために動員されてゐたものである。勞働勤務は、營利によつてなされてゐるのではなく、自國建設のためになされる、尊い勞力なのである。ドイツ國の至ると

ところで、民族の叫び聲を耳にしたことである。たちあがるものゝ勇ましさと、強烈さの中に民族力の力強さをおぼえたことであつた。

## 2

國民運動は、民衆の持てる内側の力を盛りあがらすものであつて、やがて發展すべき方向と理想をかかげしめることになる。いかに民族力の吐け口をもとめるかは、民族死活の問題に關係してくる。吐け口の無い民族力は、内部的爆發をおこして行くことにもなるだらうし、或ひは、意氣銷沈せしめることにもなる。伸びゆく民族は、つねに相應の吐け口をそなへてゐるもので、それを「たふとい」姿にまでたかめていつてゐる。すなはち、伸びゆく方向を民族本來の使命だとおぼえせしめることになる。これらの使命が精神を相手とするときは「理想」となつてあらはれ、場所を相手にして考へるときは、いづこの方面にむかつて進むべきかを決する政治問題と結びついて、國民の心を、いやが上にも煽りたててゆくものである。かかる吐け口をさししめすことに依つて、民族の力づけを興へようといふこの國も務めてゐるところである。それは、各人に希望の「ばね」をあたへて、前進せしめてゆくことになる。



ドイツ國に於て、かかる發展の夢がかきたてられたのは、普佛戰爭を契機としてゐるやうだ。即ち二五三一年、ドイツ國の統一なるや、大ドイツ國を夢みる論策家たちがあらはれてゐる。ドイツ國の統一がフランス國を破つた時に生れいでたことは、ドイツ國の「ゆきさき」が輝やかしきものになることに、目をくらしめたことだ。ウイヘルム一世は、敵の大本營であるベルサイユ宮殿に於て、皇帝即位式を擧げたほどであつた。まさしく、近代に於けるドイツ民族の活動は、普佛戰爭に依つて世界爭覇の本舞臺に堂々と姿をあらはしたものと見られる。いづこの國に於ても、民族の吐け口を決定する重大なる契機がよこたはつてゐるものだ。

民族の、のびひろがる方向については、他民族との「つながり」を頭に入れておかなければならない。ドイツ民族の場合に於ては、その初めに、だれもの目にとどまることはスラブ民族をいかに取扱ふかが、最も重大な問題であつた。スラブ民族はドイツ國の東方にあるのみならず、ドイツ民族が他日發展をとげるにあつて、最も「さしはり」を起すものであることは明白であつた。今日のドイツ、ロシアとの衝突は、太古以來の民族闘争の續きに過ぎない。先づドイツ國の使命としては、ヨーロッパ中部を抑へなければならなかつたのである。今次世界大戰もやはり同じ方向をたどつて行つてゐることである。かかる大ドイツの「ひろがり」を夢みた人として、

フリードリッヒ・リスト(二四四九—二五〇六)の名をあげねばなるまい。彼は、ドイツ民族のひろがりゆく場所は、アドリア海から黒海の間にあるとしてゐる。リストは、すでにオランダの併合に言ひ及んだ者である。このリストの考へを受けついでものの中で、最も輝かしい人物としてポール・デ・ラガルテ(二四八一—二五五一)のなした豫言のするどさに耳傾けるべきだ。彼は世界に知られた東洋言語學者でありながら、文化闘争意識をはつきりとしてゐた人である。すでに物質主義と自由主義のドイツ民族の根底をむしばむものであることを指摘し、ユダヤ財界をけなしたことであつた。現在のヒットラー政権は、ラガルテの方向指示にしたがつてゐるものだとも見られるだらう。ラガルテはヨーロッパ大陸の安全保障・平和維持のために、中央ヨーロッパ國を建設すべきである。それがためには黒海方面と角部地域に住めるスラブ民族を追拂ひ、ドイツ東部の廣地域を占據せねばならぬ。それには、スラブ民族間との闘争・戰爭は必然的なものとして、準備のなされておくべきものと見抜いてゐたことである。しかるに現在のヨーロッパ大勢が、この言語學者の豫言の線に沿つて發展してゐることは、甚はだおもしろいことである。そのほか、コンスタンチン・フランチのごとく、「世界政策」のごとき本をあらはして、ドイツ國の指導のもとに、歐州聯邦をつくるように言つてゐるが、現今のドイツはフランチの夢みた限界



線をはるかに突破して戦ひつつあるのだ。有名なものでは、前ヨーロッパ戦争中、人氣を博したフリードリッヒ・ナウマンのベルリンからバグダッドに及ぶ線路を中心にして、ドイツ民族の發展を志がいたものもある。この説には、あきらかにヨーロッパ國を確保しておくためには、東洋に向つての入口ベルシャ灣を手に入れておく必要が感ぜられる。現在、行はれつつあるコーカサスの作戦は、この民族發展への方向と「つながり」があるとも見られることだらう。これらの發展方向が海外發展といふよりも、大陸發展であるところに、ドイツ民族の特質があるともながめられるかも知れない。

兎に角、近代國家として成立の日の浅いドイツ國が、海外發展に手遅れであつたことは、致し方がない。すでに世界の海外植民地が分割されてゐる後へ入りこむことは、國家方針としては甚だ危険なことであつた。それ故、民間營業の海外發展が前ドイツ植民地をもたらしめるような、「ゆきみち」をとらしめたことであつたと言へ、すでにドイツ各地の諸侯のなかには、海外發展の計劃をたてたり、手をそめたものもあつたのである。二二二二四年ごろ、バイエルン國に於ては、南米に、バイエルン國植民地を設けようとの計劃をたてたものだし、ハナウのカシミル伯爵は、二二二二三年にオランダの手を通して、ギアナに植民地を得ようとしたが、實現するに至らなかつ

た。この中であつて、ブランデンブルグのフリードリッヒ・ウイヘルム一世は、エムデンを根據地となし、海運指揮者ラウレに依つて提出された案に従ひ、二二二九年アフリカ植民の旗擧げをしたものである。だからブランデンブルグのウイヘルム一世は、ドイツ民族運動に於て、近代海外發展の先驅者、またはドイツ海軍の創始者として賞讃せられるところである。せつかく手にしたところのアフリカ西部海岸もその孫の手によつて、二二二七年には、はかなく七萬二千デユカー金貨によつて、オランダに賣拂はれるに至つたのである。それ以後、ドイツ人の手に依つて營む植民地は生れでてこなかつたことだ。ただ國情に不満をいだく者とか、經濟不安にともなつて、海外移住を試みるものは、多數にのぼつたことである。ウインフリード・エツケハルトのごときは、「種族と歴史」なるの本に於て、植民地のなき海外移住は、やたらに民族の地の喪失だとなげかしてゐる。しかもこれらの海外移住者は、ドイツ民族の中でもすぐれたところの人だつたと言つてゐるが、かかる考へは、むしろ消極的である。海外發展が政治的に母國との連絡をたれてゐたとしても、民族の血潮が世界各地にひろがることは、血の喪失では決してない。現今でも世界各地にばらまかれた、かかるドイツ移住者の子孫は、やはりドイツ人の「ほこり」を失つてゐないことに於ても分りうる、たとへば、カール・シユルツのごときは、アメリカ奴隸



解放運動に従ひ、アメリカの國務長官にまでなつたが、故國ドイツのために直接働いてくれなかつたのであるから、人材を失つたものだと言ふのだが、日本人の考へからすると、民族發展はかかる自國本位のものばかりに取らないのである。阿部仲磨が支那にあつて高位にのぼつたことはやはり日本人の意氣をさしめしたものだと思つてゐる。しかし、これらの海外移住者が、全ドイツ民族運動に、つねに關與してきたところにも、少からざる貢獻をはたしてゐると言へよう。ビスマルクが國家内政を強めてゐる間に、一方海外發展を試みたものの中には、ドイツ國直接の保護を求めうる程の海外領域を見出した者があつた。二五四三年にブレメンの商人ルウデルリツツは、アングラ・ベクエナの酋長と契約を交して土地を獲ることに成功をした。ルウデルリツツの保護願ひ出に依つて、翌年ビスマルクはドイツ國保護下に屬する領域だとして宣言するに至つた。かかる列國の「すきま」をねらつて、ドイツ植民地は發展をとげて行くことになつたものであり、ドイツ國民の植民地獲得ほど、平和手段によつたものはないと言はしめるところにもなることだ。それにつづいてトーゴ地方(二五四四年)、ドイツ南西アフリカ(二五四四年)、ドイツ東アフリカ(二五四五年)などをうるに至つたものである。しかるに二五五〇年に至つて、ザンジバル協定によつて、東アフリカの大部をイギリスにゆづりわたすこととなつて、その代り、

ヘリゴerland島を得たのであるが、ここにドイツ國民の感情を刺戟する最も大きな原因とはなつていつた。即ち翌年には全ドイツ運動聯盟の結成によつて集會をもよふし、パンフレットを飛ばし、週間新聞を發行して、世界各地にひろがれるドイツ民族の結合をはかることになつた。それは國民運動に敵對視する諸傾向にむかつて、あらそひ、たたかふことであり、青少年の訓練、訓育の大切なことに着眼をした。この運動こそ、今日のナチス國家建設に受けつがれていつた中樞の流れをしてゐるものであらう。國民運動が植民政策とつながりあつてゐることを示す良き實例である。しかし、辛苦してえた百十四萬百十五平方哩の全海外植民地も、前ヨーロッパ大戰の「あとぬぐひ」として一時に失ふに至つたのである。ドイツが失望落膽したのも思ひやられる氣がする。しかもこの間にあつて、英米の奸策こそ、まことに、にくむべきものが見られる。

ウイルソン大統領に依つて示された二五七八年の休戰條件には、ドイツ植民地の維持經營を認めてゐたところであるのに、翌年の五月に入つて、この條項の約束破棄をしらせてきたものである。全く英米のなすところの常套手段である。その理由として申し添えたところに依ると、戰爭費用のつくなひのために、全植民地をとりおさへると出たのは良いが、その上に英米的な蛇足をつけたものである。すなはち、ドイツ植民地經營の方法がよろしくなかつたとの、つくりあ



げた事實報告によつて植民地經營の資格がないと決めつけたことであつた。だから、文明にすぐれ、もつと高度な植民地經營方法を心得た他國によつて、取つてかはるべきものだとの理論をつくりあげたのである。まるで自分たちが悪いことをするに先立ち、その正當づけをしようとするあまりにも見えすいた手である。こんな弱いものゝ手をねぢあげるやうな「やりかた」を以つて、ドイツ植民地を奪ひとつていつたのである。イギリスやアメリカの甘言にだまされるやうなことが決してあつてはならない。最後は、盜賊行爲におちいることは、この一つの實例のなかに、はつきりと示されてゐる。條約破棄などのいやしき手段も、こゝまでに至つては鼻もちならぬ感じがする。時の植民地大臣は、この非難にむかつて痛烈な抗議を申しこんだことは當然なことであらう。そんな非難を一國全體にあびせかけることができるのなら、公然と法廷に於て、黒白をあらさふ方がよからうと申しこんだのであるが、取上げなかつたのも豫定の行動である。遂にそのまゝなりにベルサイユ條約の百十九項に依つて、ドイツ國は全植民地を失ひはてるに至つたのである。しかるに、また、こゝに見えすいた英米の惡辣な欺瞞があつたことだ。それは、前代未聞の委任統治法のごとき「やりかた」を編みだしたからである。なぜに直接、自分のものだとし、取上げるかほりに、委任統治の方法を取つたか。そこには、色んな原因が思ひやられるが、

二五七八年十一月五日休戦に先だちて、今次、大戦に於ては、領土の獲得を目的としてゐないことを宣言したことである。それゆゑ、戦後經營は、この宣言に依つてなされたものと見られ、弱小民族自立の名にかけて、同盟軍であつたドイツ、オーストリア、トルコ國を分裂するにとどまらず、スラブ民族の分散をもはかるところとはなつた。まことに、巧妙なる「やりかた」と見られる。人爲的に無理をした、ベルサイユ體制がくづれてはてゝゆくのはあたりまへのことである。

ドイツに植民地をゆるすことは、そこを足場として再び英米世界統治に向つての「まぜくりかへし」にできることを恐れたがためである。南アフリカ植民地は、將來、黒人兵をつくりあげる訓練場となり、南洋諸島は潜水艦基地の「よりどころ」となることを思つて否應なしに、とりあげることにあつた。それが條約破棄の直接原因であつたと見られよう。しかし、そんな良い加減な「やりかた」をしてゐたところで、ドイツ國民はたちあがつたではないか。だから、この次英米が現今の戦争に勝つやうなことでもあれば、全く想像もゆるさぬほどの兇惡なる方法に訴へることだらう。かれらに勝利の花輪などは、夢にでも渡されるべきものでない。うまく、これらの事實をごまかして美しい假面をかむつてあらはれでたのが委任統治なのであつて、聯盟軍の最高會議に依つて、委託された各國に依つて統治されるのである。統治には三種類の方法がとられたこ



とであり、第一の部類は、舊トルコ領であつた。イラク、パレスチナ國、シリアなどであつて、將來獨立するまで、政治的援助を與へるものである。第二の部類は、ドイツの中部アフリカ領であつたところで、住民の精神・物質兩方面にあつての向上に、責任をとるべきものとされてゐる。第三の部類には、わが國の南洋委任統治地域がふくまれてゐるところで、そのほか、南西アフリカ、サモア、ニュウギニヤ等が含まれてゐる。この部類では、統治委任者の領土の一部として委任者の法制のもとに、手際よく治めることができ、原住民の利益を亂さない範圍での保護を言ふのである。この廻りくどい第三部類の取きめをもつとはつきりとすれば、次のやうになるであらう。第一は原住民社會の秩序安全をはかり、第二は武器、酒類、奴隸賣買の如き非人道行爲の禁止であり、第三は、軍人根據地として使用を禁めるものであるが、領土の防衛と警察權の行使とは、ゆるされてゐる。これらの委任統治にあづかつた國は、イギリス、フランス、ベルギー、南部アフリカ聯邦、ニュウジールランド、オーストラリア、日本の各國であつて、こゝには明らかに大戰參加への「ねぎらひ」の意味が含まれてゐる。英米からの配當であり、御機嫌をとるための報酬であつたと見るべきであらう。

ドイツは植民地を失つたのみにとゞまらず、本國周邊を切りとられたのである。エルザス、ロ

ートリンゲン、ザール、ポツセン、西プロシヤ、オイベン、マルメデー、モレネー、ダンチツヒなどの周邊は切りさかれた。これは、あきらかに、かゝる突出地が將來、民族の突撃地にならざることを願つたことだらう。しかし、これらの失地もいつかは取り返される運命にあつた。ドイツ民族の結びは、離れざるときよりも、一段と強きものとなつていつたのである。各地にさかれてとゞまつた、少數ドイツ民族は、ヒットラーのゑがく大ドイツ國の叫びに、力をあはせることを誓ひあつた。英米の夢想はドイツ全民族の「たちあがる」ことによつて、美ごと思ふ手の裏をかゝれてしまつたものである。即ち、オーストリアとの合併にあひ、英米政權に加擔してゐたシュシュニツヒは、「なだれ」の前の小石のごとく、はらひさらはれてしまひ、南方ドイツ少數民族問題は、チエツコスロバキア國を吹きとばし、ダンチツヒ市のドイツ國歸屬は、ポーランド國の壊滅へと進んでいつたのである。いかに少數民族問題と、國境周邊が國家防衛上、民族發展の起點として大きな役割をなすものであるかが見られる。國家の周邊は、民族力直接の吐け口の役を受けもつてゐること。他民族に向つて示威・交渉はほとんど、この周邊地帯で行はれることである。これらの防衛部隊を英米は、もぎとつたと思つてゐたのも、二十年ばかりのことであつて、それは地雷源として、かへつて爆發する直接原因となつていつたものである。おしち



めれば、おしちよめる程、反撥力は大きくなつて「はねかへる」のである。わが國と言へ、やはりおなじことなのであつた。この簡單なる道理をわきまへずして、英米側は世界政策をすゝめてゐたやうである。そこに、舊體制をうちやぶらうとする「はねかへし」がなされていつたのである。「はねかへし」は、國境を越え、「わくどり」を破り、ほとぼしりでてゆく民族の叫び聲、血しほにほかならなかつた。たちあがる民族は、「はげぐち」を、實力を以て切りひらいてゆくのである。その吐け口をふさぐために、いかに強固なる要塞、城塞がほどこされてゐようとも、打ちひさいで乗り越えてゆくのだ。難攻不落をほこつた、マジノ線、或ひは、シンガポールに備へられた英國要塞も、こゝ數年のうちにくづれさつていつたのである。結局、人爲的な英米の「ところづけ」は、本然の姿にかへすわが國の「ところづけ」に、齒がたゝないのである。彼等にあつては、他民族の吐け口を奪ふことが「ところづけ」なのであつたが、わが國の行き方は、他民族に吐け口を與へてやることであつて、わが國本來の尊き使命が、よこたはつてゐることだ。



## 1

今までの民族歴史は、いづこの民族がどうして「おごれるもの」にならうかと、もがき、どんな風におごりたかぶつたかの物語りにほかならなかつた。一度び覇者となれば、くづれることはないと思ひあがつたものたちであつた。いづこの民族だとして、みづからの繁榮をねがはないものとはなかつたと言へ、覇者はいつのまにか、跡かたもなくくづれ散つたのが成行きをやうである。この原則は、いづこの民族にも通じるひとつの法則とみられよう。おごれるものとは心の伸びきつたものことで、收縮力をうしなつた民族の魂である。かうなると、みづから進んで困苦に耐えぬかうとする精神、或ひは正邪の判断をうしなつてしまふ。つねに「みづから」を中心にしたるものだから、相手を「たつとぶ」とか「へりくだる」心がなくなつて、その民族の下り坂におもむくことは必至である。わが國の通りきたつた「あとかた」は、つねに「つまましい」心をもちつゞけようとの、たへまさる反省努力なのであつた。相手を見て、つけあがらないところ

に、わが國が隆盛におもむくべき、これからの發動力がたまたまれてゐることである。氣のひきしまり、緊張がわからないところに、どうして民族力を集中して難關を突き破ることができよう。難關を突き破り得たものが、次の時代への「ひかり」を握り得るに至るのだ。いまや難局は、世界におそひかゝつてゐることだ。この難局は世界の中から心の「たかさ」の出來た民族に、次の世界の指導權を與へることだらう。

この時、こゝ數百年來、おごりたかぶつたヨーロッパ文明なるものがある。ヨーロッパ文明はひとつの危機をつねにはらんで進展をとげてきた。この文明の特徴は、「こゝろ」をおきざりにしてきた民族たちの、きづきあげた、ひとつの返逆・抵抗なのであつた。ヨーロッパ諸民族は、民族本來の魂をふみにじられて、セムチツク文化の蹂躪下におさへつけられてゐた。すなはち、キリスト教と封建制度にしめくくられてゐたことであるが、この「しめつけ」を突き破るに成功するところとなつた。即ち、文藝復興の聲であるが、反宗教的な線にそつて、進展をつゞけてゆかねばならなかつたところに、自個の「心」をうしなへるものとして、自個矛盾におちいらなければならなかつたのである。そこに「もの」と「こゝろ」の分裂が起される原因があり、常に「もの」の強力さを示して、セムチツク文化からの「しめつけ」を分散せしめなければならなかつた



のである。反キリスト教的になつていつた現代文明は、ヨーロッパ諸民族のキリスト教反抗から新時代の「あけぼの」が告げられるに至つたのだ。民族本來の魂がいかに重要なものかと言ふことがよく分る。セムチツク文化、ヨーロッパ文化は他民族の「こゝろ」を奪ひとらうとして現今まで努力しつゞけてゐる。心をうしなつたものは、かれらの「しもべ」「てあし」となつて、つかへることを誇りとするのだらう。それこそ、ヨーロッパ文明の世界植民地化なのであり、ヨーロッパ文明體制を世界各地に樹立することなのであつた。しかし、民族本來の魂を失はないものは、このヨーロッパ體制に反抗をしつゞけてゐるにとゞまらず、これを打破しようとしてきてゐるところだ。ドイツ民族が民族精神を主體として、あたらしきゲルマン民族の世界體制をのみいださうとしてゐるときに、イギリス民族は、「もの」と「こゝろ」を良い加減にうべあはせ、つなぎあはせる二重人格者の文明をきづいてきたことである。その悲劇はみづからの心を、ユダヤ人と言はなくとも、キリスト教に賣りはらつてきたところに原因がある。ヨーロッパ人の覺える二重人格の破綻は、心を失つたものゝ切實に體驗する、苦しみ、もがきとなつてあらはれるのだらう。そのとき東洋諸國をかへりみるときに、民族本來の魂が失はれずしてあるところに、尙ほ強味と幸福をおぼえるものだ。東洋の教へは、人の心を奪ひとるのでなくて、みづから持てる心

の「たかさ」にめざめることにあつたのだ。しかし、この尊さにめざめることを邪魔するためヨーロッパ文明は、さまざまの「めまぐるしさ」をつくりだし、わき目をさすことに務めてきた。それにひつかゝつてゐたものは、かへつて智識階級と言ふやうな民族本來の「こゝろ」にめざめぬ者たちに多かつたのである。わが國に於ても、キリスト教とか、國際行事とか、歐米學術主義者流行などに依つて、その「めまぐるしさ」をあつつけることができよう。世界的の意味をまぢがつて受けとつてゐたのである。ヨーロッパ人のきづきあげた世界につながることに、その「しもべ」になることに榮光を感じてゐたのである。まつたく、みづからの持てる「たふとさ」を忘れてゐたものとした輕はづみのことなのであつた。しかし東洋のめざめも遂にたちいたることゝなつた。このとき、近代におごれるヨーロッパ文明の假面を見抜いておくことも必要であらう。

おごれる心のきざすもとは錯覺にあるとも言はれうだらう。ヨーロッパ人は甚だしい錯覺のもとに近代文明を始めていつたことなのであつた。ものを見つけ、考へだし、つくりだしたのが、すべて自分等の手になつたと思ひあやまつたところに、今日の世界體制の「つまづき」が、かもされてゐた。次第に調べはじめるとつれて、自分らの「うぬぼれ」の皮が剝がれ初めかゝつたの



である。世界各地を見つけたのはヨーロッパ人だと言はうとするのであらうが、ヨーロッパ人の至るまへに諸民族は、その土地に「ねじろ」をつくつてゐたのである。その「ねじろ」の破壊に少くなくからざる興味をおぼえたのが、かれ等なのであつた。それを冒険・探險・調査だと名づけ、知らなかつたものをヨーロッパに持ちかへり報告をなし、あたらしき世界の「ところづけ」をなしたのである。動物・植物・礦物にとゞまらず、人間をもその調査の対象にするやうになつた。ことに人間を対象とするときに於て、その錯覺はことさらはつきりとせられるに至つた。すなはちヨーロッパ人が、もつともすぐれた人種だと決めてかゝつたのである。ことに皮膚の色で區別わけをなし、黄色人種とか、褐色人種とか、黒人人種とか呼びなして、みづからを白色人種と名乗りいでたのである。これなども、まさしく錯覺である。白色であるのが決して進歩したのでなく、むしろ退化なのである。かれらが皮膚變白症、色素缺乏症であることに氣づかないのである。これを生物的な現象としてながめるならば、家畜化の経路においてながめることができる。即ち、野兎、野猪のごときを家畜にすることによつて、次第に色素を失ふことになり、眼の色もかはつてくることである。かれらの生活が人間家畜化の経路をたどりきて、一人がよろこんでゐるのである。都會の人間などは、やはり、この家畜化の経路にいたものがあり、都會といふ「か

こひ」のなかに色さめてゆくのが普通である。そのとき、有色人の體力のさかんなること、抵抗素の強さなどを認めねばなるまい。また、黄色人種の頭髮は直狀毛であつて、白色人種は波狀毛であるなどと區別をするのであるが、波狀毛などは「ちぢれ毛」として、日本人からはきははれてきたところである。ところがヨーロッパ文明は、わが國に於ても人間美の見出し方をヨーロッパ的になさしめたやうであつて、アイロンでちぢめあげたり、過酸化水素で「あかけ」になしたりして得意でゐるものゝ心地が知れないのである。色は黒ければ黒くてよく、白ければ白くて差支へないが、民族の心の「つけどころ」がかはるやうなことがあつては重大なことである。人間を幾ら動植物のやうに分類したところで、決して人間の「ねうち」はでてこないのである。皮膚とか、毛狀とか、目つきとか、鼻の形とか、またドイツのブルメンバツハが始めた頭蓋骨の分類とか、キヤムベルの始めた顔面角度とかによる分類は、なにか客觀性があつて、分類の標準にこそなるやうであるが、どこか「まとはづれ」の氣持がするものである。その形體狀の特徴と精神力を結びつけたのが、近代ドイツ民族學となるのであるが、民族の魂が決して、かゝる肉體上の條件に依つて決定せられると見るのは、あまりに人間にむかつての「ながめかた」にあまいところが見える。人間の精神はかゝる決定的な宿命的なものでなくて、つねに條件を破り、あたらし



い境地をひらきつゞけてゆく内側の力だ。そのあたらしい境地をひらきうるものは、ヨーロッパ人種だけの特権と決めることのできないことは分りきつたこと。人種問題で能力・性格の奪ひ合ひ、とりきめをしてゐることは小田原評定にすぎない。しかし、ヨーロッパ人は積極的に東洋人は消極的だなどと決めこむものこそ、あつかましい至りである。そのきめこむ標準は、つねにヨーロッパ人中心に依つてなされてきたところにだれもが氣づかずして、その決めこみ方に従つてゐたのである。そして、口をひらけばヨーロッパ人はえらいと言ふのであるから恐れ入る。かゝる風に「もの」をよせあつめたり、分類わけにするものが「えらい」人間だと言はれうるだらうか。たゞ、向ふの「てくだ」に酔はされてゐるものが、かゝる口をすべらすことにならう。

近代のあらゆる人文科學なるものは、すべてこの傾向をたどつたものである。ヨーロッパ人が世界において何をなし、どうしたかを調べ書きつけることが、あたらしい學問、思想であつて、世界各地にたもたれてゐる高き「こゝろ」は下積みされてゐたことである。言はゞ、東洋の高度なる文化もヨーロッパ人に依つて認められるのでなければ、その「ねうち」「ありか」も決められぬと言ふ具合で、今日の學問はヨーロッパ人の符號と「よりわけかた」「みかた」で形づくられてゐる所である。人類學、人種學、民族學のごときは、かれらが唱へだしたことであるから、殆ん

どヨーロッパ人の獨占場だと言へよう。動物から人間に進歩してきた考へは、あきらかにキリスト教に返逆した一つの「よりどころ」なのである。すでに、その思想の中に於て、危険なる見解におちいり易いことは、ダーウィンの説のときに言ひ及んだことである。「生存競争」とか「適者生存」とかは、ヨーロッパ人の今日ある状態を世界住民に認めしめようといふところの裏づけに外ならない。生存競争によつて、ヨーロッパ人が他民族に打ちかつてきたことを證明してゐるのだ。それに、たゞ、生物發展史の上に、人間が他動物を負かし進んできたばかりの理論ではなかつたのである。生存競争に絶對優勢を確保したものは、ヨーロッパ人種のみであるとうぬぼれてゐるところがはつきり分る。この理論のねらひどころは、人間を動物化するところにあつたのであつて、他民族を人間並みに扱ふ必要のないことを暗にほめかしてゐることだ。「適者生存」などに至ると、その見解はますます、うぬぼれあがつたものだ、わかりうることである。今日のヨーロッパ人の「なりあがり」は、適者生存の理によつて世界制覇をなしたことを説明してゐることだ。すなはち、かれらからあたへられるもので世界住民は満足してゐなければならぬし、その體制に最もかなふものが、生存しうると言ふ最も低劣なる考へがひそんでゐるのだ。人間の進んできたことは、そんな動物的なものゝ法則のなかにあつたのではない。實にたかき魂、心を見



いだしうるものが生きのびる勇氣をあたへたのであり、生存者は環境とか、外的條件に支配されなかつたところに、あたらしき世界に向つての「かちこゑ」はあげられていつたのだ。こんな「かちこゑ」を、はつきりと心得てゐて、ヨーロッパ人文科學をながめ、批判せねばならぬことは大切なところである。われ／＼はいつまでも、かれらの偶然的な學說に「しりうま」に乗つて居る必要はない。その人類學と言ふのもすこしも、この領域を一步もでてゐないのだ。

たとへば原人種とか、原始人とかの考への中にも、やはりこの種の考へ方が流れてゐる。即ち猿から人間に進んでくる間に中間時期があつたと想像するところに、こんな説がなりたつことである。しかし、かゝる體形上からの議論であるのならば、人間から猿に進歩したとの議論もなりたゝないことはない。環境を中心として見るときは、猿の方が餘程、人間より進んでゐるのである。その齒から、手のありさまは、人間の「からだ」より進んでをり、人間の方が原始状態を多分に保つてゐるとの見方も成立することになる。人間の位置は、かゝる外形論ばかりで決定することはできないことだが、世に名高い原人種骨格の發見なども、にらみあはせておくことにしよう。

色々の原人種の問題でも、最後はヨーロッパ原始人につながつてくることで、ヨーロッパが、人間の「おこり・はじめ」のやうな錯覺におとしこまれやすいことである。なるほど、オランダの一生物學者デュ・ボアが二五五一年に、ジャバのツリニルに於て、ピテカンツロウプス・エレクツスを見つけたこともある。ひらく傾斜した頭蓋骨と、左大腿骨と二本の齒に依つて原人種の遺骨だと決めこむに依つて、ジャバの原始人として世の中に評判をかちえたものである。また北京近くに於て、二五八一年のこと、スエーデンの地質學者アンデルセンが、化石を含んだ堆積物のなかから、頭蓋骨の斷片を得て、これこそ原始人の遺骨であつて、シナンツロウプス・ベキネシス、普通北京人と呼びなしたことであつた。まさしく、これらの仕事といふものは、ヨーロッパ人の鼻をたかくせしめるに、とゞまつたにすぎない。しかしヨーロッパに於けるがごとく、秩序たち「つながり」のあるものとして見られないから、いまだ、番外飛入りの感じをいだかされる。そのほかヨーロッパをのぞいた大陸としては、南アフリカのロデシアに見つけられたもの、時にはアメリカ・ネブラスカに見つけられた原始人齒と言ふのは、鮮新时期（第三紀最新期）に於ける熊の齒であつたことが後に分り、またオーストラリアに見つけられた原始人の腰部と言はれるものゝごときは、後世に至つて、カンガルウのものだつたことが、證明せらるゝやうな場合もあつたりすることだ。これにひきくらべるとき、ヨーロッパに於ける原始人から始まる石器文化



は現在、ヨーロッパにつながつてくるやうに仕込まれてゐるので、ヨーロッパの古いことを頭にきざみつけられる可能性が多い。ヨーロッパ人が優秀のみならず、ヨーロッパの國土、歴史まですぐれてゐるものだと、次第に印象づけてゆくことだ。近ごろの世界文明史をとりあつかつた本は殆んどこの原始人問題から、あつかひはじめてゐるところには、こんな「わけがら」のあることも見のがせない。こゝろみに、ヨーロッパの原人種、原始人の歴史なるものを眺めてみよう。

イギリス國サツセクス州ビルトダウンに於て頭蓋骨の斷片が見つけられて、エオアンツロウプス・ドウソンニ（ドウソンの見つけた原始人）と呼ばれるところだが、頭骨が猿に似てゐて、未だ決定を見ない。これは、原始人でも一種ちがつたものだらうと言ふもの、あるひは顎骨と頭蓋骨とは別々なものだとの説があるわけで、はつきりとした「ところつけ」を得てゐない。先づ、ヨーロッパの原始人は、ネアンダータル人から始まるだらう。これは、ドイツ國デュセルドルフのネアンダータルに、原始人がすでに絶滅した動物の骨を以て火打道具をつくつたものが発見せられたところから、その名が始まる。二五一六年に至つて骸骨の部分、頭蓋骨の頂邊が石灰石から切出されるに至つて、ネアンダータル人種の決定をみたものである。ネアンダータル人種は、その後ヨーロッパのみならず、クロアチア、クリミア、ガリレー地方にも見出されるに至つてゐる。

しかし、二五六年に至つて、ドイツ國ハイデルベルグ近くのマウエルに於て、地下八丈に達する古代河床から人骨が発見せられ、これを、ホウモウ・ハイデルベルゲンシス（ハイデルベルグ人種）と名づけるに至り、ネアンダータル人種の祖先にあたるものだとの論斷に立至るところとなつた。凡そ三十萬年から十五萬年位前だらうといはれる。二五六八年に至つて、南佛・ムスチエーに於て、手荒くきざまれた石器が見つけられるところとなり、石器時代のムスチエ時代を劃するところとなつたもの。しかし、いまだ家畜を使用した「あとかた」もみられないが、「火」をつかつたものとせられてゐる。ムスチエ時代は、ネアンダータル人種と關係のあるところで、南佛のラ・クウイナに於ても、ムスチエ時代の器具とともに、ネアンダータル人種型の骸骨が見つけた。ネアンダータル人種は眼窩の上に隆起した骨があり、また糸切歯が目の下から齒に至るまで、ふくれでてゐたことで特徴づけられてゐる。現代人に、ネアンダータル人種の血すぢがひきつがれたかどうかは問題であるが、オーストラリア原住民に、このネアンダータル人種型が見つけれられるなどと言つてゐる。それにしても、絶滅したものともみるのが妥當であらう。しかし、この人種の問題よりほかに、人間文化の曙光がヨーロッパに打ちたてられていつたやうに思はれはじめてくる。ネアンダータル人種以前にも舊石器時代があつたところで、その石



器物の未熟な手工から時代區別をしていつたところである。現在では、シエーユ、アシユールとか、ムスチエー、アウリナツク、ソレトレー、マグダレネなどの區分の仕方は、考古學者によつて當然のこととされてゐる。シエーユ時代は、最初の氷河退却時代から始まり、凡そ五十萬年前のころからだと言明せられることだ。これらの推算とか、推量まですべてヨーロッパ人並みにすることはあるまいと思ふ。アジア大陸には、舊石器時代の前期のものはないなどと、そのまゝヨーロッパ人の言ふことを受けついでゐては意氣地ないことである。少くともアジア大陸が、文化發祥地ぐらゐの意氣込みと事實を示さねばなるまい。發掘・探見がいつまでもヨーロッパ人の手にまかせられてゐるべきものでない。アジアを中心にした人類文化史こそ、世界文化を進めるに主動的なものだつたことを示すだらう。

ヨーロッパ人に言はしめれば、かれらの現在文明は、遠く五十萬年以前からヨーロッパにさかえきたる光榮の運命におかれてゐたことを、世界の人々に信ぜしめるのだ。いつの間にか、ネアンダール人種は絶滅して現在、ヨーロッパ人の祖先たるべきフランスのクロマニヨン型があらはれてくるところとなつた。現在、ヨーロッパに於ける人種は、北方人種、アルプス型、地中海型の三種に大別せられるところであるが、これらの人種は、決して同じヨーロッパ人種と呼ばれ

るには、どうかと思はれる程、雜然たるものである。そのほか、ダイナリツク型とか、東洋型などの區分が、つけ加へられることである。アルプス型と言ふのは、あきらかにアジアから來たものであり、現今、ヨーロッパの中幹をなしてゐるところのもの。かゝる人種をヨーロッパ大陸の中幹にたてないところには、あきらかにヨーロッパ體制の獨立にくるしんでゐるところが見られよう。この人種は、ダニユープ河に沿つて、ヨーロッパに入りこんだところであり、長頭系の方よりも強力なることをものがたつてゐる。したがつて、褐色の眼色、褐色の髪毛が、北部地方に侵入をつゞけてゆくのも遺傳法則に於て、北方人種の子孫よりも強いことをものがたつてゐる。これらのことでも、北方人種には、深い「なやみ」があるわけだ。弱いものを強いものと見せようとしても、むつかしいことだらう。生理的にも北方人種は退化しつゝある兆候がみえるのである。成年期がおくれてきてゐるところであるし、女性におとづれる月經期も、二三年おそいと言はれてゐることだ。この人種をまんなかにして、世界再建を夢みすることは、むしろ、實行不可能に近いところであらう。世界は、たゞ「自分」だけをよくして、世界征覇をつゞけてゐようなどと、甘い汁はいつまでも吸つて居れないにきまつてゐる。



## 2

ヨーロッパ人からすれば、ヨーロッパが世界を動かし、支配する策源地だと錯覚するに至つたことである。すでにヨーロッパには、太古以前から秩序のある文化が、現代にまで進展してきたものと思はせしめるのである。しかし、これには餘程の考慮と考察がめぐらされておかねばならない。今日の世界文明なるものが、決してヨーロッパを中心にして起つてはこなかつたのである。むしろ、東洋を中心にしてきたと見るのが妥當であらう。しかるに世界歴史は、ひとりヨーロッパに於てのみ、行はれたやうに考へせしめたことである。凡そ、日常生活の用度品の如きも、東洋生活の優美さを取り入れることに依つて、ヨーロッパ文明と名づけらるに至つたのだ。ことに絹織物は支那の産物であり、木綿は印度の地に於て栽培されたところである。だから古代ヨーロッパ人は、皮革の着物をきてゐたもので、チロールの牧童が身につけてゐる皮ズボンの如きが、古代ヨーロッパ人の衣服であつたらうと推察せられてゐる。絹と棉を東洋の二大文化地に負ふてゐることを想ひだすがよい。今日のイギリス紡績業をきづきあげたのも、その昔は東洋人の天才が自然の生物をうまく手ならし應用した「おかげ」だと思はねばならぬ。

石器時代の狩獵生活から、次第に土地におちつく文化生活を習ひ初めたのも東洋からの影響なのであつた。牧畜・農業は、ほとんど東洋人の手になつたところなのである。しかるにいつの間にか、小麥とか、豚とか、鶏を常食として自分のものゝやうに取澄してゐるのであるが、豚は支那人の手で野猪から改良されたところだし、小麥は小アジアに生育したものであり、鶏はインドシナに於て、野生の雉から家禽となつたところである。胡椒とか、砂糖のごときは、インドに於て使用され、ヨーロッパからなされる東洋貿易に缺がされないものであつた。近ごろ、常食としてゐるジャガイモのごときは、アメリカ・インディアンの手によつて栽培されたことは、すでに述べたところである。果實の多くも東洋から移植されていつたところである。アラビア人の手に依つて、ヨーロッパへもたらされた果實だけでも、桃、オレンジ、グレープ・フルーツなどを擧げることができる。こんなところからすると、ヨーロッパ人は東洋の植民地の役割をしてゐたところと見るべきが當然だらう。二五九七年、シカゴ發行になるグリフィス・テラーは「環境・民族・植民」のなかで面白いことをいつてゐる。人間が一度び北極の上から地球を見おろせば、人類文化の發達の状態がそのまゝ分ると言ふのである。ヨーロッパとか、アフリカ、濠州、アメリカ諸大陸は、アジアの手足をなしてゐるので、世界大陸の胴體をなしてゐるアジア大陸から人



類及び文化の發達があつたことは、疑ひをいれないといふのである。これらの生活物資が一朝一夕にできあがつたものでないことは、はつきりと分るところであらう。

文藝復興期にあたり、文化發達に大きな動因を興へた紙と、印刷術も共に支那に於て發達を遂げたものであつた。支那に於て、紙は七六五年には作製せられたと記録されてをる。ヨーロッパへ紙製法が傳へられるに至つたのは、千二百年前、メソポタミヤに於て、アラビヤ人につかまへられた支那人から習ふところとなつたのである。それゆゑ、紙と共に付きものゝ木版畫、壁紙などもやはり支那からである。木版刷は、一四〇〇年ごろには支那にあつたものとされ、その後、二百五十年を得たころには取りはづしのきく印刷器がつくられてゐたことであつた。かゝる印刷器が蒙古人のヨーロッパ侵入の波に乗つて持ちきたされてヨーロッパにくると、グーテンベルヒの印刷器の發明となつて、どこからきたものであつたかは、なほさりにされるところとなつた。それどころでない近代植民地を開くにあつて、二つの「よりどころ」となつた磁石と大砲も、同じく支那の發明にかゝるものなのである。磁石がなければヨーロッパ人の海洋發展など夢にも出来なかつたところだ。磁石が方向をさし示すものとして、支那に於て使はれたときは、七八一年のことであり、車輪に取りつけられて應用され、すでに航海術につかはれてゐたところのもの

である。それが、やはりアラビヤ人の手を得てヨーロッパにつたはるところとなつた。大砲の原理は、支那の打上花火と同じ理窟によつて發達したものとおもはれる。これらの文明生活の主要道具が東洋から發達をしたものであることに思ひを致して見るならば、ヨーロッパ人が世界文明をつくりあげた理論は、寸分もなりたゝないのである。

社交生活と云はれるものゝ大きな中心をなすカード遊びとか、象棋遊びのごときも、やはり東洋に起源をもつてゐることだ。カード遊びに「さいころ」は支那から韃靼人の手を通じてヨーロッパに傳へられるところとなつた。これらの遊びごとのなかに東洋の運命觀・宿命觀などを汲みとつたところである。ことに「さいころ」は不思議な運命でヨーロッパ人をもてあそんだことである。象棋はインドに於てつくりだされた遊びであり、イランを経てアラビヤに傳はり、それから九百年前ごろヨーロッパに傳へられたものである。また支那から傳へられたお茶が、どれほど大きな社交生活の「なかだち」をしてゐるかを思つてもわかるだらう。生活することの楽しさ、喜びは、すべて東洋からならつたところであつた。

近代の科學の醫術・天文学・數學・物理・科學なども、すべて東洋からアラビヤ人の手にわたリ、そこから習ひとることを得て、近代文化の地盤をつくりあげることを得たのである。ギリシ



ヤ文明やローマ文明が、一時にひらきでたやうに見えるが、すべて東洋からする資源力・文化精神にあづからなかつたならば、かゝる文明などは、毛頭きづきあげられなかつたのである。ことに、ギリシヤ文明の起りが小アジア地方であつたことなどを思つてもわかるだらう。現在では小アジアに文明の花を咲かせたヘート族の文化を受けついでものだと言はれるやうになつた。ことにギリシヤ哲學者に受けつがれた思想のときは、インド哲學なのであつた。かゝる東洋との連環をたち切つて、ヨーロッパ文化地帯をつくりださうとしたところに、ヨーロッパ文明の破綻があつたのである。ヨーロッパが再度立ちあがることを得る目標は、アジア文化へ立ちもどることなのである。むしろ、地形的に、文化的にヨーロッパ大陸なるものを、アジア大陸から切離してゐるところに無理がある。自分等が白色人種だと思つても、白色人種もアジアにつながつてゐるところのものである。それは、ヨーロッパからアジアへ移動したものだとの理論は、おかしなものである。鐵文明をヨーロッパに残したケルト民族とか、イリア民族なども、やはり東方から四方に文物を運んできたものであつた。ハルスタットとか、ラ・テーヌ文明などと言はれるのがその跡方である。すでに人種の大別をみても、地中海型、アルプス型、北方型と三大別され、これらの相互の混交したものが現在ヨーロッパ人種をなしてゐるので、決して、これらの白色人種

が單一的なものと思ふならば見あやまりである。また、ヨーロッパにだけ、ゆるされ、そだちあがつた人種と思はずに至つては尙更のことである。他民族に侵入されることがなかつたとみるのも、うはすべりがした眺め方である。ギリシヤ、ローマ、中世紀時代を通して、東方民族から散々にいちめつけられてきたところである。その「しかへし」が現代文明なのであつたが、これ以上伸び發展する「のぞみ」はなくなつてきたと言へよう。即ち、精神的な「ゆきつまり」が一番大きな根本原因をなしてゐるのだ。

キリスト教に依つて、ヨーロッパは救はれなかつたし、また科學精神も近代ヨーロッパを統一づけるどころか、度々の大戦争を誘發する原因となつてゐるとゞまる。現在ヨーロッパは、いかに秩序つけるかに就ては、まづたく混迷であると言はねばならぬ。この中にあつて、ドイツのみが民族の榮光の中に政治理論をみいださうと努めてゐるところだ。まさしく、ヨーロッパが一つの強力な文化地帯であると思はさうとしても、すこし現實の状態を見ると、分別さまざまであることが見ぬかれるのだ。今でもヨーロッパ人は、ヨーロッパ大陸が統一的な文化地帯であることを主張するであらう。即ち人種に於て白人種であるとし、宗教はキリスト教であり、言語はインド、ヨーロッパ語から出たものであるとの考へ方である。しかし、これらの統一體に見えるも



のも、各民族の寄り集りであつて、機会があることに、その無理をした寄せあつめが崩壊しかけるのである。いまだヨーロッパは眞實に民族の「ところ」を得せしめるやうな高き理念は、一日として見出されてゐないのだ。それゆゑ、小數民族が不満々の中に生活をしてゐる。ヨーロッパに行はれる戦争は、ほとんど小數民族に正しい納得と地位を與へないところから導火線がなされてゐる。バルカン地方がヨーロッパ戦争の火薬庫とみられてゐたのは、小數民族があつまつてゐるからのことである。しかしよく觀察すれば、ヨーロッパ全土が世界平和を亂す火薬庫であることが分る。アメリカ國がヨーロッパ政治への介入をつとめてさけてゐたのは、たしかに賢明な政策であつた。しかるに、この度の戦争には、いらぬお世話を焼いたものである。そのとき、東洋の民族問題にいたると、ヨーロッパ人のやうに小さな「自個」にとらはれることがない。心の奥底には大きく「まとまる」調和のひびきをしまつてゐる。たとへ日支事變に依つてなごらく闘争をつゞけてゐると言へ、歐米人のごとく他民族へ對しての「にくしみ」からは、少しも起されてきたものでない。めざまないものに向つての「こらしめ」の戦ひであつたことを想ひだしても分ることだ。凡そ世界を治めようぐらゐの心がけがなされてゐるのならば、自個の「はからひ」をぬぐひさる位の心がけが確立してゐなければならぬのだ。しかるに歐米人は、かゝる民族の

たかき心を磨きあげることが、ないがしろにして、「自分のもの」であることを主張しあつてゐる。とつたとか、とられたとか、をかしたとか、をかされたとかで争ひあつてゐる。若しか、ヨーロッパが、同じヨーロッパ人のものであるならば、こんな見にくい闘争などが起る筈がない。ヨーロッパが經濟、社會制度、政治組織に於て、世界にすぐれたものだと決して言はれないのだ。文明國はすべてヨーロッパの仕方を習ふかのやうに印象つけられてゐるが、東洋在來のこれらの政治・經濟・社會の構成法には、一段とすぐれたもの、即ち、高き精神がこめられてゐることに注目されたい。東洋生活形態は、文明程度の低いものであると信ぜしめたのは、あきらかにヨーロッパ植民政策の線に沿つた謀略とみることができよう。みづからの國をいやしめて、みづからの文化をさげすませることが、かれらの最も大きな「ねらひどころ」であつた。「つゝしみ」と「卑下」とは似てゐるやうだが、心の持ち方で斷然ちがつてゐるところである。みづからを卑下してヨーロッパ人を、をがんだものも少からずあつたことであらう。東洋といふところは、かゝる卑下した民族の寄りあつまつてゐるがごとき印象を與へようと一生懸命に務めてきたところであるが、東洋人の高き心は決していやしめられてゐない。かれらが民族精神を買ひあつめるため、繰りだしたキリスト教傳道にむかつて、強固なる抵抗線を張つたところにも、その強みを見



なければならぬ。しかし、卑下する心もちこそ、屈服する一步手前の心もちである。東洋人であるものこそ、みづからの持てるもの、「たふとさ」「うつくしさ」「ちからつよさ」に心つくがよい。わが國がこの戦争にのぞんでゐる所には、かゝる東洋本來の姿を、はつきりあらはさうとじてゐる心持ちが、はつきりと見える。ヨーロッパ人は他民族によきものを持たせておくことができぬ性格らしい。世界植民政策で突然の發達をとげたイギリス帝國だつて、おなじ部類に入るのだ。アメリカが獨立してから植民政策を變更するに、餘儀なくするに至つたと言へ、自分だけの天下をほこる氣持は、少しもかはつてゐなかつたのだ。心がけがまちがつてゐるヨーロッパが、瓦解の運命に突きすすんでゐることは、ひとへに自我を滅却した「つゝましさ」がないからである。

現代のヨーロッパが少数民族問題で瓦解の端緒をつくり、最後は植民地經營で「いのちとり」になるものと斷定がくだされるだらう。同じヨーロッパと言ひながら 植民地を持てる國と持たざる國とは、生活程度が數段の違ひをなしてゐることだ。ヨーロッパと言へども、フランスとドイツを境ひにして、その氣持が、はつきりと見られたところであつた。オランダとドイツをくらべあはせても、はつきりと見られることだ。ところが持てるものが、強く精神力のすぐれた

ものではなかつたことが、この度の大戦争によつて證明すみとなつてゐる。すでに本國土の七十倍も八十倍の植民地をもつてゐたオランダ國、ベルギー國も、消失してしまつたし、世界第二の植民地所有者として、おごつてゐたフランスも、敗北の浮き目をみるところとなつた。残るところはイギリス帝國ひとつとなつてゐるが、これが「いのちとり」は、インドの喪失に依つて決められることであらう。インド自身が、イギリスの「きづな」をはねのけることも、あまり遠くないことである。

かのローマ帝國の崩壊も、みづから呼びよせた運命なのであつた。おごれるものは、みづから進んで難局にあたらうとする心がけがなくなる。出来ることなら「ひと」をして相撲をとらしめ、自分は樂な目をしてゐようと言ふのである。他民族を「やとひ兵」につかつたのは良いが、おのづからに抵抗戦を打ち破られる破目になるのだ。自民族に襲ひかゝつた危険は、自民族で拂ひのけるだけの覺悟がなければならぬ。他民族をうまく、つかひこなしてやらうとしてゐる間は、政策的なものから一步も抜けでてゐない。いくら他民族を寄せあつめて國土防衛にあたつたところで、くづれおちる可能性が濃厚である。ヨーロッパの民族政策は、いざ戦争のときに、「たすけ」になつてくれることが、最もな願ひなのであつた。それゆゑ、十字軍の例に待つまでもなく、つ



ねに他民族と共同の陣を張ることが、ヨーロッパ戦争の行き方だと見られる。大國といふものは精神的に虚弱になつてゐるのが常である。おごるもの久しからずの道理であらうし、自民族のことは自民族の手でなすといふ自決精神にこと缺けてくるところとなる。ヨーロッパ人はヨーロッパの政治形態が自民族自決の形態をとつてゐると言ふのであるが、これは前大戦に依つて、假りに決められたベルサイユ體制にすぎなかつた。この共同防衛の精神が、最も具體化したものこそ國際聯盟の機構であつたとみることが出来る。英米は自國土の防衛に他民族をしてあたらしめようとしたが、いづこの國とても責任をとるものはなかつたのである。みづからの信念に生きようとする日本國、ドイツ國、イタリア國が脱退したのは當然である。かゝる聯盟機構こそ、英米の勢力に追従してゐる氣力のない小數民族國家の寄りあつまりなのであつた。寄せあつめたものが、決してひとつなものだとは言はれないのである。ヨーロッパ人は寄せあつめて「ひとつのもの」と錯覺してゐるものであるらしい。「ひとつのもの」の信念は、その精神の高さの段階に依つて、決められるのである。ヨーロッパの政治形態がおなじだとか、生活程度がおなじからとかに依つて「ひとつのもの」であると言はれない。眞實に「まつらふ」心があるときにひとつのものといはれるのだ。「アジアがひとつのもの」と言はしめる最高なる寄りどころは精神の高さに於て

認められることだ。生活環境がおなじだから、ヨーロッパはひとつだと言ひはることは出来ない。大切な精神がばら／＼なのである。それゆゑ、ヨーロッパは完全なる統一體をなしてはゐないと見るべきであらう。今まで利益都合上のことから、寄り合ひをなしてゐたところから統一體であるかの如く見せかけてゐたのである。その統一體と云ふのは、白人種の強力な「かたまり」であることを示し、なか／＼他民族からをかされることのできないことをほこつてゐたのであるが、少ししらべると、ひとつの假面にしか過ぎないことが分つたことである。ヨーロッパは再び、ローマ帝國の運命を、たどらうとしてゐるものだ。

ヨーロッパ諸國の衰退は、近來目だつてきた出生率の減退によつて、拍車をかけてゐるところである。この出生率の減退こそ、ヨーロッパ人の精神萎縮の象徴とながめることができるだらう。子供を産むと、經濟とか、家事・責任・保護などに依つて自個生活の享受をさまたげるとの思想からである。即ち環境に打ちかつ精神が次第に弱つてゐることを示すことである。かゝる現象につれて、晩婚主義にかたむいてゆくことだし、獨身時代が永くつゞくことである。かゝる風潮が日本にも攻めかけてきてゐるやうであるが、わが國は古來、早婚主義の風習のやうであつた。母胎の發育が伴はぬとかとの理論で反對せられてきたところであるが、適齡期かどうかは、直感で



きめることができる。決してヨーロッパ人の「まね」をした晩婚主義などは、うちくだかれるべきことだ。国力の充實は國民思想の健全に依つて、ふるひたゞされるところだし、したがつて年に自由思想を吹きこまれた女性などには、結婚生活をしてまで苦勞をすることはないとの觀念を持たされやすい。職業婦人とかの存在は、ますます、かゝる自由思想的なものを吹きこませ易い傾向になる。結婚は精神と感情が純粹にして、たからかな時になされるが良い。それは健全な家庭生活の根柢をつくりあげることにならう。晩婚になるところには、不純なものが入りこみ低級化することが多い。不健全なるものを家庭生活に持ちこましめ易い結果になる。

最も、ここ數十年で出生率の減退を示したのは、イギリス本土であり、二五三六年に一千人につき三六・三の出生率を擧げてゐたのに、二五八六年には一七・八を示すまでにさがつてゐる。このことは、ヨーロッパ全土に示されてゐる兆候である。人口減少で世に名高いフランス國のときは、かへつて減退率に於ては、ヨーロッパで最低位を示してゐることである。二五三六年には二六・二であつたものが、二五八六年には一八・八となつてゐる。それ故減退率だけを較べるときには、その期間五十年間に、イギリスは五割一步をしめしてをるものであり、そのとき、フランスは、二割八分を示してゐる。一方、衛生設備の進歩に依つて、死亡率も極めてひくくなつ

ていつたことで、「うべあはせ」がつくものと言はれうるだらう。イギリス本土では、二五三六年には、死亡率二〇・九だから、五・四の自然増加をみたところであつたが、二五八六年の死亡率は、一一・六だから、差引きは六・二で、かへつて自然増加に於て殖えてゐることである。しかし、殖えてゐるからとて、民族自體の出生能力が減退していつてゐるのだから、決して樂觀はできないのである。ヨーロッパは自然に民族力の衰弱をきたしつづつあるものと言へる。ことにフランスの死亡率は低減もしてゐないので、自然増加率は、ほとんどない状態をつづけてきたことである。二五三六年の死亡率二二・六をしめしてゐるから、三・六の自然増加であるが、二五八六年に至つては、死亡率一七・五でわづかに千人につき一・三人の増加をしめたことにすぎない。ドイツ國も出生率は、この五十年間に四割九分の減退でイギリスにつぐ不成績を示してゐるが、自然増加に於て、英佛を凌いでゐたわけで、今日の大戦を執行せしめてゆくことができる一大根據となつたところだ。二五三六年には、四〇・九の出生率に、二六・三の死亡率、したがつて自然増加率は一三・六であつたが、二五八六年には出生率二〇・七に、二五八五年の死亡率は、一一・九を示してゐるので、その差引きは八・八を示してゐて、自然増加に於て、英佛を凌いでゐたことが分る。かかるところにも、ドイツの伸びあがつてくる力がひそんでゐたのである。人口



民族と植民

三〇四

増殖はまさしく國民の意氣の反映と見なければならぬ。かかるとき、ヨーロッパ全體の出産率のいちじるしい減退は、この、おごれる民族の衰亡しゆく、あはれな姿と見ることが出来る。考に主なる國の、出産、死亡率表を併せて、書きとどめておくことにする。

民族	二五三六年	二五六一年	二五七三年	二五八六年
ドイツ	出 四〇・九	五三・七	二七・五	二〇・七
イタリ	死 二六・三	二〇・七	一五・〇	※ 一一・九
	出 三九・二	三二・六	三一・七	二七・八
フランス	死 二八・八	二二・〇	一八・七	※ 一六・八
	出 二六・二	二二・〇	一九・〇	一八・八
イギリス本土	死 二二・六	二〇・一	一七・七	一七・五
	出 三六・三	二八・五	二三・一	一七・八
オランダ	死 二〇・九	一六・九	一三・八	一一・六
	出 三七・一	三二・三	二八・三	二三・八
ノルウェー	死 二二・五	一七・二	一二・四	九・八
	出 二一・八	二九・六	二五・二	一九・七
	死 一八・〇	一四・九	一三・二	一〇・六

※ (二五八五年)

スウェーデン	死	出
	二四・三	三三・〇
	一八・三	二九・〇
	一四・三	二三・一
	一一・七	一八・二



13

ア  
ジ  
ア  
へ  
か  
へ  
れ



目下世界動亂のもとが、人種問題・民族問題・植民問題の扱ひ方の良ろしくなかつたところから、原因をしてゐることがほぼ明らかにせられてくるに至つた。みづからの信念と自信を失つたものたちが、ただ世界の彌縫策を以つて「やりくり」をしてきたことであるが、事態は「やりくり」とか「まねあはせ」では、すまなくなつたのである。世界の人心は、その缺陷の生れでてくる根本原因を、ふさぎとめようとして、もがいてゐるのである。その根本原因はすべて、心の持ち方の悪るさから起つてゐることに氣づかないのである。自分の心つきの悪さにめざめる迄には、容易なことであるまい。たがひに、おのれの言ひ分の方に正しさがあると思ふから、宣傳に躍起となるのだ。現代は、宣傳時代だとも言はれるほど、相手の「心つき」「ながめかた」をまるめようとかかつてゐる。少しでも對策をおこたれば、相手に言ひふくめられる状態であつた。英米はなほも、この手段によつて、世界の諸民族を言ひふくめようとして躍起となつてゐる。もう今のやうな時代になつては、かかる宣傳に迷はされる者はないと思ふことだ。しかし、かれらが使ふ常套手段は、その宣傳にからませる利權分配を以つてするので、その利權に目をくらませる諸國

があるかも知れない。しきりに戦後經營などを話しあつてゐるのは、明かに宣傳と利權のからめあはせなのである。かかるとき世界の迷夢を打ち破ることこそ、日本國のなすべき正しき使命である。世界の「みだれ」をととのへ、始末をつけうる國は、わが國をのぞいては、ほかに求めうることは出来ない。わが國は古來、「まごころ」を以つて貫きとほすことを民族の「ほこり」としてきたことである。もう世界の人心は、英米的な「からくり」には、あきあきとしてゐるのだ。「こころ」を以つて「こころ」に答へる世界秩序をのぞんでゐるのだ。相手をだましたり、ごまかしたりするためいろいろ／＼な會議を催ふして、威勢をしめした英米的な「やりかた」には、弱りぬいたことである。そして「からてがた」の發行について、議論しあふといふのが、會議のねらひどころであつた。

現代文明があまりに人爲的に、技巧的に組みたてられてゐるところに、なにか落着かないものがある。ヨーロッパ的なものなかに、特殊利權の存在がみとめられてゐる。かかる特殊利權をゆるすところに、世界の民心にはびつたりとしたものが感ぜられない。心から相手を迎へる喜びが感ぜられぬことだ。民族と民族の「つきあひ」は、心が基本になつてゆかねばならない。おのれの特権利權をゆるしてゐて、相手にあふことは、相手をみくびつてゐることである。なるほ



ど、英米には莫大な資本金や工業製産品、生活程度の高きものもあるが、それだからと言って、一段と高く許せる道理はひとつもないのだ。それゆゑ、その利権に他民族をもあづからしめて、みづからを特殊あつかひにしてみらふと、他民族にのぞんできたのだ。英米國の査證を以つて、世界をうろつきまはつてゐる英米人の傲慢さはどうであつたらう。かかる一段と高きところから低きものを見おろすやうな態度で、世界統治策を論じてきたところである。はなめがねの底に光つてゐる皮肉と冷淡な目つき、その目つきに「こび」を賣つて、追従をしてゐた世界なのであつた。世界は限られたものに依つて、ほしいままにせられる理由はひとつもないのである。全人類が同じく生きるためには、おなじやうな「まごころ」を以つて、むかひあつてほしいのである。人種には、いろいろ、さまざまの容貌をしたものもあらうけれども、おのれの「まごころ」が踏みじられたときは、淋しくてかなしいであらう。特殊利権で踏みおさへられてゐるときには、反抗ともがきが繰り返へされるだらう。英米の條約とりきめは、すべて自個の特殊利権を他民族に認めさす契約なのであつた。かかる人爲的な「しほりつけ」を打ち破ることこそ、世界人類の汚辱をぬぐひさることの出来る第一歩である。

いよいよ、ヨーロッパ生活を切り上げて、イタリー・ナポリで日本船に乗船したときに、この心持が胸をついてくることであつた。船にはインド人が、かなり乗り込んだことであるが、人間の魂の叫び合ひは、生活程度の高低に依つておこされなことを知り合ふことであつた。インド人達は、この船上にかへりくるところに、東洋の「まごころ」を見出したのだ。ヨーロッパ諸國のいとなんでゐる社交的な、儀禮的な、氣取り屋の生活に、生命のはねかへる「よろこび」はえられなかつたのである。インド人達はヨーロッパをあとにすることを喜んでゐる風に見えた。若しか、ヨーロッパになほ、のこつてゐたいと言ふやうな日本人があるならば、よほど、ものずきな人達である。東洋の「ふるさと」へかへりきたる程、心が大きな動悸を與へることはない。南イタリーの夕日が油をといたやうな色どりで夕雲に照りはえてゐるとき、靜かな地中海を、黒き日本船は東洋にむかつて進みだしてゐたのだ。その東洋は、はたして歐米人の植民地として踏みつけられてゐたのであらうか。おそらく一般的な「ながめかた」をすると、東洋は英米の「さしづ」のままに動いてゐるやうであるが、それは、ただ「うはべ」のことに過ぎない。統治策なるものが、うはべに見える「ととのひ」だけだと思ふならば、大まちがひなのである。政治はむしろ、後にうごいてゐるものを、つかまなければならぬ。一度び東洋のいつこの英國植民地にしても、足をふみ入れたならば分る。この「うはべ」のうしろに動いてゐる眞實の姿に觸れること



ができるからだ。いづこの民族だとして、歐米人の「やりかた」に共鳴をしてゐる國はないのだ。東洋に於て、日本國が進んで共鳴したやうな印象を興へ、英米側から先進國だと、あやかされ、もてはやされたことだ。なぜ、東洋諸民族が前進をしてゐないかの如き感じをいだかせるかと言へば、東洋人は猛烈に英米文化に向つて抵抗をしてゐるわけである。かれらが興へるものを、受けとるまいと勇ましく戦つてゐるのだ。かれらの興へるものは、いつもの「からてがた」か「どくまんぢゆう」であることを體驗してきたのだ。この抵抗力こそ、近代文明と東洋精神とのあらそひなのであつた。遂にこの東洋に於ける抵抗が、歐米の覇權を動搖さすに至る日は、近づいてゐるのである。あきらかに歐米のなした他民族統治策・植民地經營は失敗に終つたことを、ものがたつてゐる。ただ他民族の生活程度をヨーロッパ的にするとか、ヨーロッパ的な道徳心を持たすとか、醫療設備・社會設備をいくらしたところで、民心を納得ささなければ何の役にも立たない。ただ、物好きに他民族の生活の中に「さしでぐち」をのぞけたに過ぎない。かかる經營をなすことに依つて、自己手腕の「えらさ」をしめさうといふのである。決して他民族の幸福をねがつてまで、そんな設備をしたのではない。自國の勢力の強さを、さししめさうと堂堂たる殿堂を植民地に設けていつたのである。ここにも見られるやうに「もの」を以つて、人の「ところ」を

買ひとつてゆかうと言ふのである。それを言ひかへれば、歐米人のなす「えらさ」のまへに屈服することを求めてゐる。それらの建築物を「あしば」として、かれらの世界體制への「かため」に使ふとしてゐたのである。若しか、かかるものに心動かされてゐるものがあるとするれば、かれらの「てくだ」にまんまと乗せられた人々である。かかる傾向は、年若い青年男女に起りやすいのではあるまいか。わが國に於ても歐米人のなした「ミツシヨン・スクール」は、大きな弊害を現在に於ても、流していつてゐることだ。この重大時局にあつて、最も反省のなさるべきことである。敢へて、日本だけのことでなく、全東洋に於いて、おなじことが言はれうる。

なぜに、かかるみじめな失敗をなさねばならなかつたに、英米は氣づかなかつたのである。それは、他人種、他民族をみくびつたところに直接の原因があるが、もつと突きつめたところには歐米人の精神分裂を擧げねばなるまい。即ち「もの」と「ところ」の扱ひ方があやまつてゐたのだ。人間生活を支配してゐるものは「もの」だとの考への上に、世界政策に向つてゐたことである。經濟斷交とが、經濟封鎖をすれば、一國民は悲鳴をあげる位に心得ちがひをしてゐたところに、その政策の「よりどころ」が見られる。しかし、民族力の眞實な抵抗といふもの、鬭争、攻撃は、「もの」の多い少いの打算に依つては動かされない。かう言ふところに東洋的なことと、西



洋的なものとの區別が見られうるのかも知れない。歐米人は、生存競争はどこまでも「もの」の奪ひあひで、「ところ」は、ものあてがひ方如何によつて、いつでも買ひとれると思つてゐるのだ。若しか不満なれば屈服させればよいと考へてゐる。だから暴動でも起れば、實力を以つて抑へつけることだ。それに依つて、治安維持がなされてをと思ふならば、大それたことである。「ところ」からなびいてきたものでない治安維持は、たえまざる暴動をおこさしてゆくことである。「ところ」は、そんな實力發動など位でおさへつけられるものでない。この見えすいた政策の「あやまり」にさへ氣づかないのだから、いかにおごりたかぶつてゐるものであるかがわかることだ。歐米人の植民政策には、この「ところ」の方向をさししめす目標が、なにもなかつたのである。ただ、その目標には、フランス革命以來の「自由」「平等」として歐米人によつて、わりあてられる分配權で満足してゐなければならぬに過ぎないのだ。かれらの頭からは、人間解放は、ただ權利をあたへること位に思つてゐるのだ。その權利を歐米人が與へてやるぞと申すのである。もう、その手にのつてゐる時代はゆきすぎたのである。あたらしき時代が世界におとづれかかつてきたのである。これらの行き方は、いたづらに他民族を喰ひものにしてゐたことなのであつた。名目だけは美しく書きつけられることであるが、そのねらつてゐるところは、ちがつてゐたので

ある。ただ世界にむかつての申しひらきができるために、かかる人道的な目標をあたへたのである。自由・平等などを歐米人から「さしづ」して貰はなくして結構なことである。東洋人の考へてゐるものは、かかる野獸的な思想目標では決してない。自由・平等とは野に放たれた「けだもの」についてのみ言はれうることだ。心の高さは、かかる權利主張・要求にもとづくやうな、自由・平等に依つて動かされることはない。つづまるところは、近代文明は、他民族を下敷きとして、「わが世の天下」である歐米文化をうたはうとしてゐたものである。いつまでも自個陶醉はゆるされなかつた。もはやヨーロッパ人の、ばらまく魔薬に依つて他民族を酔はしめておくことができなくなつてきたのである。民族の自覺、「めざめ」は、世界各地におこされたことである。今やこの雌雄を決する段階にと、追しこまれるに至つたのである。

この時、世界の諸民族は、ながらく踏みこまれてゐた心の「おもし」がはねのけられ、「まごころ」を以つて、生活が共にできる國をたがひに求めあえいでゐたのだ。それは生きものが、太陽の光りをもとめさがしてゐるやうに、民族の心の中には、つねに指導者を仰がうとする心が動いてゐる。わが日本民族とて、曾つては、かかる「てほん」を他國にもとめたこともある。時には、歐米諸國にその指導を求めようとしたこともあつた。しかし、その指導のよろしからざるこ



とを見抜いたのである。いまだ、支那の蔣政権などは、その迷夢からさめず、指導を英米に仰いでゐるのみならず、東洋民族がたがひに骨肉をけづつて、あらそふの非を敢へてしてゐるのだ。支那事變が、日支兩民族間の「つきあはせ」でなかつたことは、現在にいたつてはつきりと分るところとなつた。支那を躍らせてゐたのは、英米自由主義國家群なのであつたのだ。それに向つて、はつきりと正邪の闘争を開始したのである。ヨーロッパの指導につくか、東洋精神の指導につくかの決戦はなされてゐるのだ。

東洋精神とはなにかと言ふならば、「おほきなころ」と申すことができるだらう。「おのれ」だけをよく見せかけようとか、おのれの立場を言ひはるやうな淺ましい心の無くなることである。この大きな心と言ふは、個人にあつては、せまくるしい見解をおこさずして、ものの姿をありのままに見ることだし、そこから伸びあがる力をあたへてやることだ。東洋人の心には、「はぐくみ」「そだて」ようとする美しい心が常にあふれてゐる。西洋人にすれば、ものに向へば、どう役立て、つかはうかと頭をなやますだらう。役にたつか、たたないかで、その善惡を決めつけることである。東洋人にとつては、役に立つとか、立たないかの功利的な判断で、ものの優劣をきめることはしない。むしろ、區別をしないことを以つて、「たつとし」となしてきたところである。役

立たないものでも、生きさす道をえらんできたのである。一人が喜びを得るのならば、自分のものだけとしてしまつておかないことである。西洋人のやうに幸福と言ふものが、數とか量に依つて決められることはない。また、わさはひが身にふりかかるときは、他人に及ぶことを、ことさら恐れて自分がすべてを引き受けて立たうとする心がけがある。その高き東洋精神が、ヨーロッパ野獸思想に依つて、踏みじられてゐたことだ。人間の生きることが野獸のごとく「むさぼる」生活形式のなかに楽しみは求めえられないのである。東洋の道のごとく、「むさぼる」心がつつましく抑へられてゐるところに、心の磨きが光つてゐるのだ。この「おのれ」を相手におしつけない禮讓のなかに東洋生活の「きまり」は保たれてゐたのに、床の上に土足であがり込む靴をはいて、腰をおろさず、ろくに挨拶をもちあはすことなく、商用・商談にふけることを「たのしみ」にするヨーロッパ生活が、古い「しきたり」を打ち破れと表口から突入してきたのである。ところが、この「あつかましさ」の方が、簡便な生活法だと心得たものたちは「あたらしがりや」として、ヨーロッパ生活の後押しをするものとして現はれた。一時は、東洋思想も、この「あつかましさ」に蹴とばれてゐた恰好であつた。しかし、ヨーロッパ人の假面が剝がれる時代は到來したのである。人間の尊さと大きく生きるところに使命をおぼえさす東洋精神に、ふたたびかへる時



代は、いま現にせまつてゐる。世界統治も、民族對策もこの公平なる心に生きること念願とする東洋の心にまで、かへつてこなければ「をさまり」がつかないことになつてゐるのだ。支那もインドも、フィリッピン、チベット、タイ、アフガニスタン、イラン、イラク、アラビア諸國も、會つて東洋人がいだきつづけた心の「たかさ」にめざめるときとはなつたのである。

かかる時、この亂れた世界に「ゆきみち」を與へるが如く、生き生きとした大生命にあふれて立ちあがつてきたものこそ、日本民族なのである。かみに萬世一系の「おほぎみ」をいだいてゐるところに、この歐米からする民族力分散・消失に務めた謀略に敢然と戦ひうることになつたのだ。歐米からする甘言に満ちた宣傳、思想戰に依つて、その民心を分裂することはできなかつたのだ。このアジア大陸の東邊に位した一小國には、東洋のすべての高き心がをさめいれられ、國民傳統のなかに「いのち」となつて呼吸をしてゐたのである。その呼吸は、たしかに西洋思想のやうにまぶしく誘惑に満ちあふれたものでなかつたが、人爲的な工作によつて、決してゆすぶられる程、浮はつたものでなかつた。しかるに、その大きな民族精神・民族生活の「ありかた」に心づかなかつた歐米は、文化地圖の上に堂々と、半未開國だと書きこむやうな非禮を敢へてしてゐたのだ。しかも、内心では、この小國が、東洋にむかつての歐米工作の據點ともなる位に思

ひこんでゐた者達がゐたかも知れない。ことに米國は、自分の思ふままになる位に心得てゐたところの一小國が、世界一の資源國としてゆるしてゐたアメリカに向つて、抵抗するやうな態勢をとつてきたのみでなく、國際聯盟を脱退し、英米の世界體制に眞向ふから反對し、昭和十六年十二月八日に至つて、ハワイ眞珠灣にアメリカ艦隊撃滅の壯舉にでたのである。

ここ七、八十年の間に日本が急激な進歩をとげたことに、だれもが目を見はるることである。その原因として、英米文化をとり入れたからだ、説明するところであるが、これほど、危険な説明の「しかた」はない。それは、歐米的なものがすぐれてゐて、東洋文化の方が駄目だと言つてゐるのにほかならぬ。日本が今日の力をあらはしてゐるのは、歐米文化の「まね」をしたからなのでなくて、實に、その高き心を自由調達に働かしたからである。その「はたらき」は、自個を大きな生命體のなかに返して、つまらないことにこだはらなかつたからである。大局を生かすところに、日本人の妙を認めねばならない。東洋全體が、世界全體が生きかへるためには、この日本人のうつくしい生きかたにまで、たちいたらねばならないだらう。わが國は歐米人の如く他民族に、いらぬ「さしでぐち」は、のぞけないだらう。他民族の繁榮こそ、世界をいかすものとして、そのまま、日本國につながる大きな心の上に立つてゐることである。この大きな心の中にあ



つては、自己撞着をきたさすやうなことは、決しておこらないのである。それは、他民族を下敷きにして、自分だけは良いことをしようとする心が毛頭ないからである。

ここに至つて、日本國の英米に向つての宣戰布告は、ヨーロッパ人のごとく、たゞ利權の奪ひ合ひから起つたところの戦争ではなかつた。利權の「うばひあひ」に依つて起るやうな歐米式の戦争は、いやしいものである。わが國の戦争には、たかき心が失はれずに、道義性がふくまれてゐる。それは恐れ多き「おほみこころ」からいできるところの人類にむかつての限りなき「おあはれみ」の心なのである。一時は、このあつかましく横暴だつた英米人にむかつての敵愾心もあつたかも知れないが、この戦争は、そんな「にくしみ」とか「かたき」を超えてゐる高き心からきてゐるものと拜察される。相手をたたきのめし、屈服さすところに良い氣持になれるのでなくて、迷へる英米人の心をいれかへさすことに、正しき目あてがあるのだと思はれる。かれらの心の持ち方では、決して世界秩序がたもたれるものでないことを指摘したところであつた。それどころでなく、かれらの下敷きとなつて苦しんでゐる諸民族は、數かぎりないことである。このあやまてる世界をたゞしきものに、おかへしにならうとの思召しが、この度の戦争にうかがはれるのだ。だから、日本國が自己一國の野心を満足さすがために、決して戦つてゐるのではない。

その心持は、全世界の住民が自己の屈辱を感じざる世界にもどさうとの「おほみこころ」からの戦ひなのである。この「わけがら」を知ることになれば、全世界の民族がこの聖業にくははることを喜ぶことだらう。今や、あたらしき世界の「ところづけ」がなされつつある。たかき心こそ民族發展の中心をなす原動力である。東亞全體・全世界にわたつて、「まこと」の世界がおとづれようとしてゐる。たがひの「うぬぼれ」を投げうつて、この最高使命に生きることこそ、人類究極の目的であることをさとるわけだ。すでに、次の世界文化の向ふべき方向は決定せられてゐる。それは、西洋思想の迷夢から目ざめて、東洋の大きな心にめざめることである。ここに敢へて、アジアへかへれと一篇をつけ加へて、歐米思想からする、民族と植民にむかつての扱ひ方に、終末をあたへようとするものである。



あ  
と  
が  
き



初めに豫定してゐたことと、かなり違つたものとなつたことである。初めの豫定では、太平洋を東へとわたり、大西洋をこえ、地中海をよこぎり、紅海を縦断し、インド洋を横断し、再び日本國へかへりきたるまでの、いろ／＼の諸民族を扱はうとしてゐたことであつたが、船がスエズ地狭に入らぬまへに、この仕事を一先づ、まよめとのへ上げることにした。かへつて、ここで「一まよめ」にすることができた方が、今迄、全世界をにぎつてゐたと思つてゐた歐米の「やりかた」を、はつきりとすることを得たやうである。たま／＼の「たまもの」であつたかも知れない。

この仕事を書きをはるにあつては、いろ／＼の想ひ出がかさなることだ。この仕事を、はかどらしてゐる間に何回となく、身邊雑事で中絶をしなければならなかつた。筆を中絶した出来ごとでも、五つや六つはある。よくもかさなつたことであつたと思ふ。明日からは教育實施で、四日間訓練をうけることになつてゐる。これには張りきつてゐる。エイ、ヤツの聲もろともに、木銃を突きこんでこようといさんである。この訓練にでかけるので、いそいで、今日しあげるやうになつたのだ。もすこし、書きつけようと思つてゐた部分は、續篇のごときものへ廻すことにした。

民族と植民の書へ「アジアへかへれ」の言葉をかきつけて終ることを幸ひとする。時局は、長期戦のごとき様相を呈してゐるやうに見えるが、これこそ、皇軍が全身をうちこんで戦へる「をたけび」なのである。この、いきづまるやうな双方の對抗戦力のなかに、次の時代に向つての大きな民族力の波動を感じるのだ。いくら米英がたくみな宣傳と局地的な勝利をえたところで、大局の力の前には、どうすることもできないのだ。老朽船が大きな船腹を裏がへしにして、ひつくりかへるやうな時機が到來しつゝあるのを覚えるものである。英米軍には、長期戦に向つての忍耐力と訓練にこと缺けてゐる。なるほど英米軍は、尙ほ、戦力に餘裕があるともみる人もあるが、かれらの平素のだらしない生活は、一朝にして、かかる大きな忍耐力にたえ抜くことはできないと思つてゐる。内側に集くつてゐる心の「ゆるみ」が、大きな「ひびわれ」をいれてくるに違ひない。しかし、かかることを豫想して戦つてゐる日本人は、だれ一人もあるまい。

おほぎみの御命令の前に、まつしぐらに前進をつづけつつあるのだ。

この前進が當然なされるべき日本人の使命であつたことを、自然に、この書物は説きあかすこ



とを得たやうで、望外のよろこびである。

國內の心からの一致協力こそ、前線の敵を打ち破るに至る要因である。

時あたかも、山本元帥は南海の大空に散華をし、アリユウシヤンの一島、アツツの守備兵は、全員が玉碎することによつて、皇國の使命は一段とはつきりさせられるところとなつた。この世界に「ところ」を得せしめる聖業に、だれもが勇躍してあづからねばならない。

また、大東亞に於ては、さきにピルマの獨立がゆるされ、本年中に、フィリッピンの獨立をみるに至るといふ、アジア民族の自覺と發展の情報がもたらされる。また、インド獨立のために、闘へる一志士は、日本に援助をもとめてくると言ふ風で、世界建設のたくましい意氣と希望が感ぜられることだ。この書も、ちいさいながら、かかる「いぶき」のなかに、うぶとゑをあげることを願つてやまない。


昭和十八年六月二十三日

り  
ゆ  
う  
た  
ん

亂丁落丁等不完全な品がありました節は直接御申込下さい。何時でも取替へます。

昭和十八年十二月十日初版印刷  
昭和十八年十二月十日初版發行(二〇〇部)

出版會承認  
4 240030 號



著者 徳澤龍潭  
發行者 藤岡淳吉  
印刷者 奈良直一

民族と植民
●定價 二圓八十錢
●特別發行 十錢
合計 二圓九十錢

發行所 株式會社 聖紀書房  
東京都神田區神保町一ノ二二  
東京都小石川區藤町一五六

配給元 日本出版配給株式會社

印刷・常盤印刷所(東京210)  
製本・小林製本所



